

茨城県教育財団文化財調査報告第447集

# 与曾内遺跡

急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和2年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第447集

# 与曾内遺跡

急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和2年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団





遺跡遠景（西から）



遺跡全景（鉛直）



## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県竜ヶ崎工事事務所による急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策事業に伴って実施した、龍ヶ崎市与曾内遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、弥生時代から江戸時代にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡のほか、江戸時代の塚を確認でき、土地利用の一端が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県竜ヶ崎工事事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、龍ヶ崎市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和2年 3月

公益財団法人茨城県教育財団  
理事長 小野 寺 俊





# 例 言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成 29 年度に発掘調査を実施した、茨城県龍ヶ崎市塗戸町 991 番地ほかに所在する与曾内<sup>よそうち</sup>遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成 29 年 6 月 1 日～6 月 30 日  
整理 令和 2 年 1 月 1 日～3 月 30 日
- 3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 奥沢哲也  
次席調査員 作山智彦  
調査員 張替清司
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長皆川修のもと、以下の者が担当した。  
次席調査員 内堀 団
- 5 本書の執筆分担は、下記のとおりである。  
内堀 団 第 1 章～第 3 章第 3 節 1～3(1)～(3)・(5)・(6)・4, 第 4 節  
中山なな 梶ヶ山真里 坂上和弘 第 3 章第 3 節 3(4)
- 6 本書の作成にあたり、出土人骨については、独立行政法人国立科学博物館人類研究部人類史研究グループ中山なな氏、梶ヶ山真里氏、坂上和弘氏にご協力いただいた。
- 7 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。なお、SK 1～3 の墓坑から出土した人骨は、独立行政法人国立科学博物館人類研究部にて保管されている。

# 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第 IX 系座標に準拠し、 $X = -8,440 \text{ m}$ 、 $Y = +36,840 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C..., 西から東へ 1, 2, 3... とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c...j, 西から東へ 1, 2, 3, ...0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット PG - ピット群 SB - 掘立柱建物跡 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑・墓坑 TM - 塚  
土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は 200 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

- (2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	施釉・朱墨・摩面		付着繊維		煤		
	土器		石器・石製品		金属製品		硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は ( ) を、推定値は [ ] を付して示した。

- (2) 遺物番号は遺構毎の通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- (3) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 遺構の主軸は、長軸（径）を通る軸線を主軸とし、主軸方向は軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
与曾内遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	12
1 弥生時代の遺構と遺物	12
ピット群	12
2 奈良時代の遺構と遺物	13
竪穴建物跡	13
3 江戸時代の遺構と遺物	15
(1) 掘立柱建物跡	15
(2) 塚	16
(3) 墓 坑	20
(4) 与曾内遺跡の出土人骨	23
(5) 土 坑	31
(6) ピット群	31
4 遺構外出土遺物	32
第4節 総 括	33
写真図版	PL 1～PL 8
抄 録	



# よそうち 与曾内遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

与曾内遺跡は、龍ヶ崎市の東部に位置し、利根川<sup>とねがわ</sup>低地に面した標高 25m の樹枝状に開析された南北 100m、東西 150m の狭小な台地上に立地しています。遺跡の範囲は、この台地の範囲にあたります。今回、発掘調査した地点は、遺跡範囲南東部の台地縁辺部分で、南側は崖となっています。急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が、平成 29 年度に 475㎡について発掘調査しました。



## 調査の内容

確認した遺構は、弥生時代のピット群 1 か所、奈良時代の<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡 1 棟、江戸時代の<sup>ほったてばしら</sup>掘立柱建物跡 2 棟、<sup>つか</sup>塚 1 基、<sup>ぼこう</sup>墓坑 3 基、<sup>どこう</sup>土坑 1 基、ピット群 1 か所です。



遺跡全景（東から）



奈良時代の第1号竪穴建物跡



江戸時代の第1号塚



塚上に祀られた石造物



南側を向いて祀られた石造物

## 調査の成果

竪穴建物跡は調査区域外に延びているため、一部しか調査できませんでしたが、奈良時代の土師器や須恵器などが出土しています。また、床下で確認したピット群からは、弥生土器が出土しています。弥生時代の遺構を壊して奈良時代の建物が建てられたと考えられます。崖際に構築されている塚は、地域ではこうしんづか庚申塚といわれています。高さは約1mで、頂部には4基の石塔せきとうが崖に南面して集められていました。陶磁器などの遺物は塚の北側から出土していることから、当初は北側の台地平坦部に向けて石塔が据えられ、当地域の先人たちの信仰の対象になっていたと考えられます。

この台地は、弥生時代から土地利用が始まっていることが確認できました。塚の盛土からは、縄文土器も出土していることから、土地利用は、縄文時代までさかのぼることも予想されます。遺跡範囲の縁辺部分の調査でしたが、当地域の歴史を解明する資料を得ることができました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成28年12月5日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成28年12月7日に現地踏査を、平成29年1月6日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成29年1月16日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに事業地内に与曾内遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成29年1月30日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。平成29年2月10日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成29年2月17日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成29年2月24日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに与曾内遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について平成29年5月20日から平成30年1月31日までの期間で委託を受け、平成29年6月1日から6月30日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

与曾内遺跡の調査は、平成29年5月29日から6月2日で表土除去工事を実施した。発掘調査は、平成29年6月1日から6月30日までの1か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	5 月		6 月	
調査準備 表土除去 遺構確認					
遺構調査					
遺物洗浄 写真整理					
撤収					

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

与曾内遺跡は、茨城県龍ケ崎市塗戸町 991 番地ほかに所在する。

龍ケ崎市は、洪積世の筑波・稲敷台地と旧小見川水系による沖積低地に分けられる。龍ケ崎市域の筑波・稲敷台地は標高 20～27m の平坦地であるが、縁辺部は浸食谷により複雑な地形を形成している。筑波・稲敷台地は、海成の成田層上に形成され、上位に龍ケ崎砂礫層、常総粘土層が重なり、関東ローム層（武蔵野ローム層・立川ローム層）が 2～3m の厚さで堆積している。筑波・稲敷台地と北相馬台地との間に挟まれた南部の小月川低地は、古鬼怒川と小月川によって形成された標高 3～6m の沖積低地であり、両者の境界は比高 15～20m の急斜面となっている。

与曾内遺跡は、龍ケ崎市街地から北東に約 5km の稲敷台地南縁の標高 25m に位置し、樹枝状に開析された南北 100m、東西 150m の狭小な台地上に立地している。この南側の台地縁辺部は沖積低地との境界を形成している崖となっている。今回の調査区域は、この台地の南東部の台地縁辺部に位置している。

### 第2節 歴史的環境

霞ヶ浦と利根川に挟まれた稲敷台地は、水陸交通の要衝にあたり、その自然の地の利を得て古くから人々の生活が営まれてきた。この地域は、県内でも有数の遺跡分布地として知られ、明治 16 年に日本人の手によって初めて調査が行われた陸平貝塚（美浦村）を筆頭に、愛宕山古墳（龍ケ崎市）、所作貝塚（旧：桜川村）の調査が行われるなど、著名な遺跡が数多く所在している。

縄文時代の集落跡は、小さな支谷によって樹枝状に開析された複雑な地形をした台地の縁辺部に点在している。廻り地 B 遺跡<sup>1)</sup>では早・前期の竪穴建物跡等が確認され、土器片や石器類が出土している。前期では町田遺跡<sup>2)</sup>で竪穴建物跡と土坑が確認されている。縄文時代前・中期では赤松遺跡<sup>3)</sup>があげられ、ほぼ環状に分布する竪穴建物跡群と袋状土坑群が確認されている。中期になると、遺跡は龍ケ崎市別所地区の西側谷津を隔てた舌状台地上に位置するようになり、小集落が確認された打越 A 遺跡<sup>4)</sup>・打越 C 遺跡<sup>5)</sup>、地点貝塚を伴う南三島遺跡 2 区<sup>6)</sup>が形成されている。また、駒馬地区の北西台地上に位置する廻り地 A 遺跡<sup>7)</sup>は中期末から後期前半にかけての大集落で、地点貝塚や土坑群を伴っている。

弥生時代では、龍ケ岡地区の南部に位置する幅 400～500m の屋代台地上に外八代遺跡<sup>8)</sup>、長峰遺跡<sup>9)</sup>〈52〉が点在し、弥生時代中期後半から後期の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代の集落跡及び古墳等の遺跡は、稲敷台地南端部に連なるように集中している。古墳等をみると前期では、廻り地 A 遺跡から 4 基の方形周溝墓が確認されている<sup>10)</sup>。前・中期で桜山古墳〈50〉がある。桜山古墳は稲敷台地南端の独立丘上に位置する全長 71.2m、高さ 8.9m の前方後円墳であり、龍ケ崎市内では最も規模の大きい古墳である。粘土槨の中から大刀・剣・短剣・鉄鏃・刀子等が出土している<sup>11)</sup>。中・後期では、愛宕山古墳・長峰古墳群がある。愛宕山古墳からは、高さ約 50cm の男子埴輪と高さ約 46cm の女子埴輪が出土している<sup>12)</sup>。また龍ケ崎市半田からは、石枕が出土したことが知られている<sup>13)</sup>。長峰古墳群では、前方後円墳 4 基、方墳 2 基、円墳 29 基が確認され、人物埴輪・形象埴輪などが出土している。また、第 39 号墳からは内行花文



鏡が出土している<sup>14)</sup>。他に、墳丘を伴う古墳は、奈戸岡古墳群、稲荷古墳、堂の上古墳、大塚古墳等がある。集落跡は主に小野川流域の東台地縁辺部と小月川低地を望む台地縁辺部に集中して営まれているが、以前の時代から継続して営まれた遺跡と、古墳時代に新たに形成され、さらにその後も継続された遺跡とに大別される。前者の遺跡として、屋代 A 遺跡<sup>15)</sup>、外八代遺跡<sup>16)</sup>、南三島遺跡<sup>17)</sup>、長峰遺跡<sup>18)</sup>が調査された。後者の遺跡として、平台遺跡から古墳時代の竪穴建物跡 47 棟が確認されており、まとまった集落を形成していた<sup>19)</sup>。また、数棟から十数棟を単位とする小集落が営まれていた遺跡として、大羽谷津遺跡<sup>20)</sup>(竪穴建物跡 5 棟)、松葉遺跡<sup>21)</sup>(竪穴建物跡 11 棟)、沖餅遺跡<sup>22)</sup>(竪穴建物跡 13 棟)、成沢遺跡<sup>23)</sup>(竪穴建物跡 13 棟)、十三塚遺跡<sup>24)</sup>(竪穴建物跡 3 棟)、尾坪台遺跡<sup>25)</sup>(竪穴建物跡 15 棟)等がある。また龍ヶ崎市奈戸岡からは、石製模造品が多数出土したことが知られている。

中世の遺跡としては、主に城館跡について記述するが、それらは稲敷台地南側の縁辺部に所在し、そのほとんどが台地上の谷津に画した突端部に立地する。いずれも戦略上有利な地形を選んで構築している。当地域の動向を概略的にみると、南北朝時代、南朝方の小田氏、北畠親房に対して、北朝方の高師冬が常陸南部に進み、馴馬城において戦闘が行われたとの記述が「鶴岡社務所記録」と「北畠親房事書」に記されている。また、南北朝の終わり頃に、信太荘は小田孝朝の支配となるが、上杉憲方・朝宗に攻められ所領を失った。小田氏の勢力後退に伴い、上杉方の代官として土岐原氏が信太荘の惣政所の役職に就き、信太荘(旧：江戸崎町、現：稲敷市)に移り住んだ。その後も小田氏と土岐原氏の対峙は続いたが、「足利基頼書状」には、大永 3 年(1523)、土岐原氏は小田氏側の八代城に攻撃を仕掛けて勝利したことが記されている。この八代城は、稲敷台地南端部の標高 25m に造営された外八代城<sup>26)</sup>(外八代遺跡)と、屋代城(屋代 A 遺跡・屋代 B 遺跡)と考えられている。土岐原氏の龍ヶ崎地域への進出は続き、永禄年間には龍ヶ崎城跡を修築して一族を城主として派遣している。土岐原氏は外八代城、屋代城の他にも、馴馬城跡、貝原塚城跡、登城山城館跡〈16〉、要害山館跡〈57〉等を支配下に置き、大統寺をはじめ龍ヶ崎地域の寺院に文書を残している。天正 18 年(1590)、佐竹義宣の弟芦名盛重は土岐原氏を滅ぼし、龍ヶ崎城を支城としたことが「佐竹義重書状写」に記されている<sup>27)</sup>。その後、富田将監から大久保岩見守の領地となり、慶長 11 年(1606)には、伊達政宗が龍ヶ崎の地を与えられ、伊達氏が幕末まで当地域を支配した。

\*本章は、既刊の『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 22 長峰城跡(長峰遺跡・長峰古墳群)』を参照し加筆した。文中の〈 〉内の番号は、第 1 図及び表 1 と同じである。

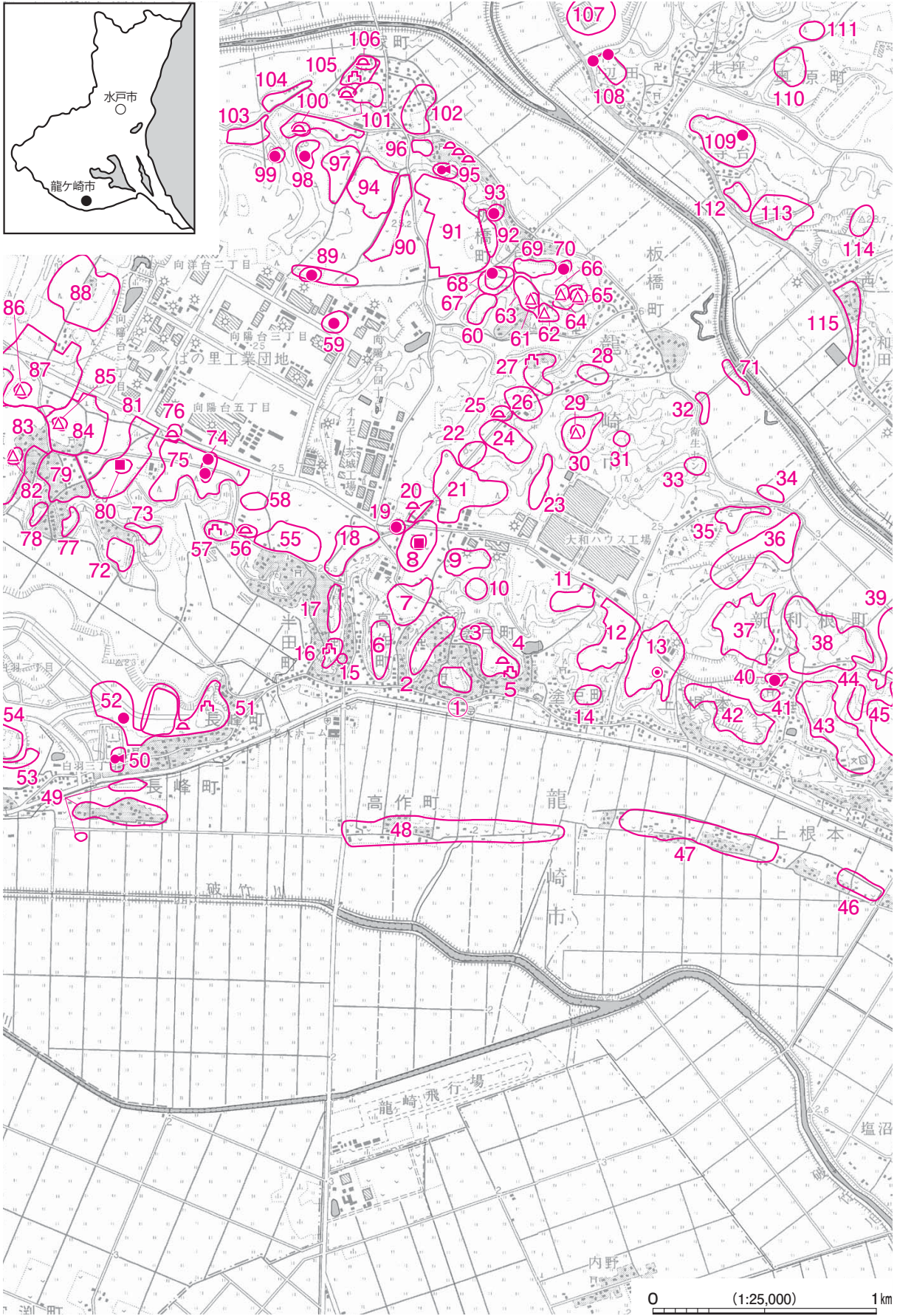
#### 註

- 1) 人見暁朗『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 5 前清水遺跡・打越 A 遺跡・仲根台塚・大羽谷津遺跡・打越 C 遺跡・廻り地 B 遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告 VII 1981 年 3 月
- 2) 山本静男『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 9 仲根台 B 遺跡・町田遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 25 集 1984 年 3 月
- 3) 註 1) と同じ
- 4) 註 1) と同じ
- 5) a 人見暁朗・沼田文夫『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 10 南三島遺跡 1・2 区』茨城県教育財団文化財調査報告第 27 集 1985 年 8 月  
b 和田雄次・斉藤弘道『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 11 南三島遺跡 6・7 区』茨城県教育財団文化財調査報告第 30 集 1986 年 10 月  
c 中根節男『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 12 南三島遺跡 5 区』茨城県教育財団文化財調査報告第 32 集 1986 年 3 月

- d 齊藤弘道『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 16 南三島遺跡 3・4 区 (I)』茨城県教育財団文化財調査報告第 44 集 1987 年 12 月
- e 齊藤弘道・小山映一『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 18 南三島遺跡 3・4 区 (II)』茨城県教育財団文化財調査報告第 49 集 1989 年 3 月
- 6) 瓦吹堅・桜井二郎『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 7 廻り地 A 遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第Ⅳ集 1982 年 3 月
- 7) 桜井二郎・渡辺和子・伊禮正雄『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 2 外八代遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ 1980 年 3 月
- 8) 青木義夫・久野俊彦『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 6 成沢遺跡・屋代 A 遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告ⅣⅣ 1982 年 3 月
- 9) a 中村幸雄・後藤義明『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 19 長峰遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 58 集 1990 年 3 月
- b 小澤重雄・高野節夫『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 22 長峰城跡 (長峰遺跡・長峰古墳群)』茨城県教育財団文化財調査報告第 184 集 2002 年 3 月
- 10) 註 5) b と同じ
- 11) 小泉光正『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 20 桜山古墳』茨城県教育財団文化財調査報告第 61 集 1991 年 6 月
- 12) 大野延太郎「常陸国龍ヶ崎発見の埴輪土偶について」『東京人類学雑誌』20 1905 年 4 月
- 13) 根本康弘「内原町出土の石枕について - 茨城県内出土石枕集成 -」『内原町史研究』2 内原町史編さん委員会 1993 年 3 月
- 14) 註 9) b と同じ
- 15) 註 8) と同じ
- 16) 註 7) と同じ
- 17) 註 5) a と同じ
- 18) 註 9) a と同じ
- 19) 菅野莞爾『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 8 平台遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 19 集 1983 年 3 月
- 20) 註 1) と同じ
- 21) 瓦吹堅『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 1 松葉遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅰ 1979 年 3 月
- 22) 渡辺俊夫『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 3 沖餅遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告Ⅲ 1980 年 3 月
- 23) 註 22) と同じ
- 24) 中根節男・中村幸雄『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 14 尾坪台遺跡・十三塚遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 39 集 1987 年 11 月
- 25) 註 24) と同じ
- 26) 註 7) と同じ
- 27) 註 7) と同じ

#### 参考文献

- ・大山年次・蜂須紀夫『茨城県地学のガイド』コロナ社 1977 年 8 月
- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図 地図編』茨城県教育委員会 2001 年 3 月
- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図 地名表編』茨城県教育委員会 2001 年 3 月
- ・茨城県史編集会『茨城県史料考古資料 先上器・縄文時代』茨城県 1979 年 3 月
- ・茨城県史編集会『茨城県史料考古資料編 弥生時代』茨城県 1991 年 3 月
- ・茨城県史編集会『茨城県史料考古資料編 古墳時代』茨城県 1974 年 2 月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 原始古代編』龍ヶ崎市教育委員会 1999 年 3 月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 原始古代資料編』龍ヶ崎市教育委員会 1995 年 3 月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世編』龍ヶ崎市教育委員会 1998 年 3 月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世資料編』龍ヶ崎市教育委員会 1993 年 3 月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 中世資料編別冊』龍ヶ崎市教育委員会 1994 年 3 月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 別編Ⅰ 龍ヶ崎の原始古代』龍ヶ崎市教育委員会 1991 年 3 月
- ・龍ヶ崎市史編さん委員会『龍ヶ崎市史 別編Ⅱ 龍ヶ崎の中世城郭』龍ヶ崎市教育委員会 1987 年 3 月
- ・伊藤勲『土岐原史紀』伊藤勲遺稿刊行会 1978 年 5 月

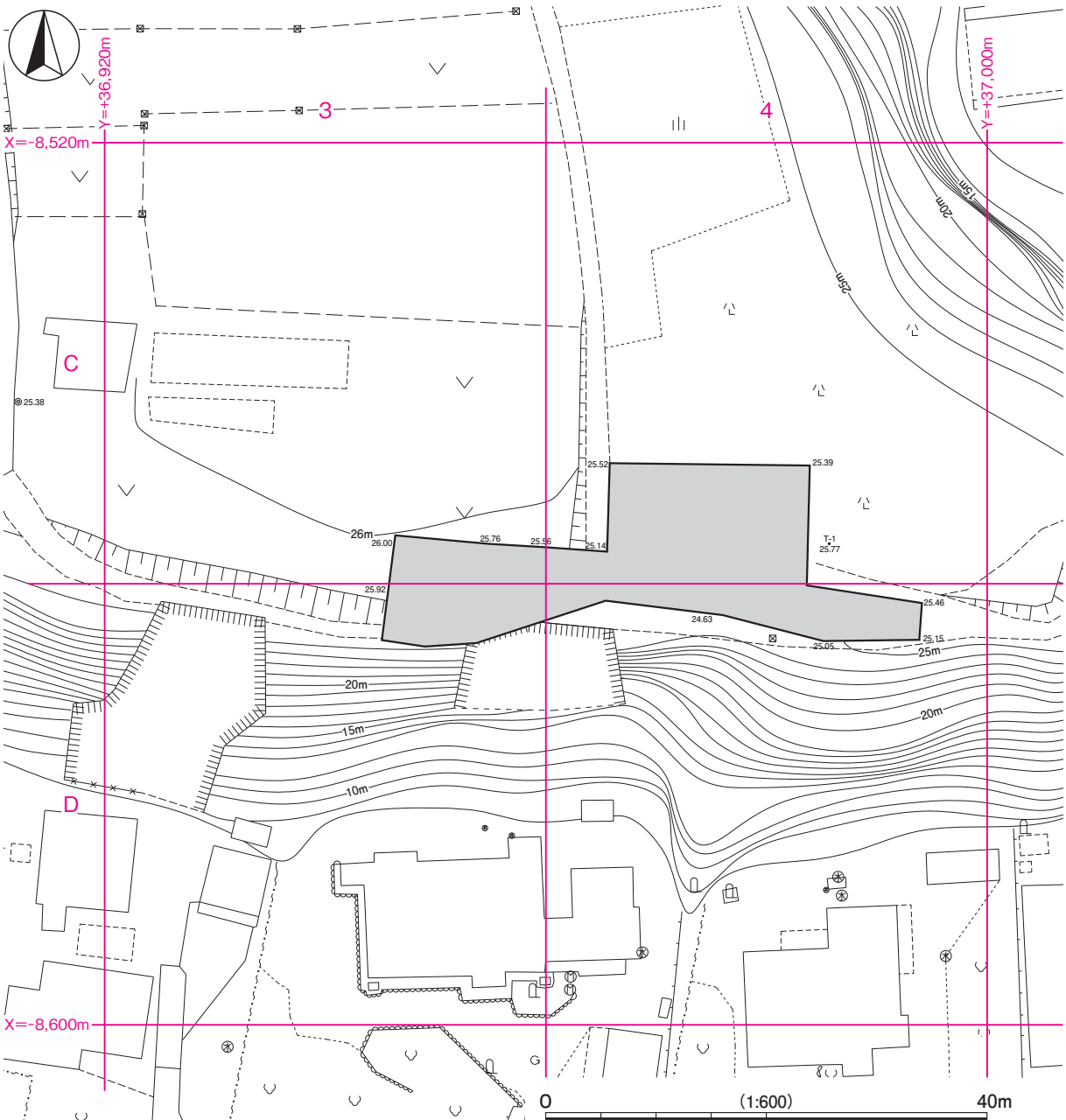


第1図 与曾内遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院 1/25,000 「龍ヶ崎」「牛久」「江戸崎」「下総滑川」)

表1 与曾内遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	与曾内遺跡			○		○		○	49	沖後、沖坪遺跡				○	○		
2	台遺跡		○			○			50	桜山古墳				○			
3	登城、馬場山遺跡					○	○		51	長峰城跡						○	
4	大日塚							○	52	長峰遺跡			○	○			
5	大日山館跡							○	53	稲荷後遺跡		○			○		
6	高作宮平遺跡				○	○			54	稲塚台遺跡				○	○		
7	平遺跡		○			○			55	宮脇遺跡		○			○		
8	塚根遺跡					○			56	合戦場塚							○
9	塗戸原口遺跡					○			57	要害山館跡						○	
10	北台高山遺跡					○			58	合戦場遺跡		○			○		
11	原遺跡					○			59	稲荷峰塚							○
12	宿遺跡		○			○			60	六条前遺跡		○		○			
13	竜貝遺跡				○	○		○	61	岡坪A貝塚		○					
14	塙遺跡		○			○			62	岡坪B貝塚		○					
15	半田遺跡				○				63	北ノ台宮脇A貝塚		○					
16	登城山城館跡							○	64	北ノ台宮脇遺跡		○		○			
17	二堂遺跡		○	○		○			65	北ノ台宮脇B貝塚		○					
18	半田原遺跡					○			66	岡坪遺跡		○		○			
19	水砂古墳					○			67	境台遺跡					○		
20	六十塚群							○	68	境台古墳群				○			
21	六拾塚第1遺跡		○			○			69	境台宮脇遺跡		○			○		
22	西山遺跡		○			○			70	北ノ台古墳群				○			
23	水砂遺跡		○		○				71	尼ヶ崎第1遺跡				○	○		
24	西山、大塚遺跡		○		○	○			72	東平第2遺跡		○			○		
25	おこり塚							○	73	東平第1遺跡					○		
26	六拾塚第2遺跡		○			○			74	仲原古墳群					○		
27	平向遺跡					○	○	○	75	仲原遺跡		○					
28	栗山遺跡					○	○		76	薄倉塚							○
29	安台貝塚		○						77	熊ノ台遺跡		○			○		
30	安台第1遺跡		○						78	南山遺跡					○		
31	安台第2遺跡		○	○				○	79	宮ノ前遺跡		○			○		
32	尼ヶ崎第3遺跡					○	○		80	出戸古墳				○			
33	道徳谷遺跡					○			81	出戸遺跡		○			○		
34	尼ヶ崎第2遺跡					○	○		82	西平B貝塚		○					
35	城取山遺跡					○			83	西平遺跡		○			○		
36	大崎山遺跡		○	○	○				84	宮ノ上遺跡		○			○		
37	作の後遺跡					○	○	○	85	宮ノ上貝塚		○					
38	西の台遺跡		○			○	○		86	養生峰貝塚		○					
39	西の下遺跡		○			○			87	養生峰遺跡		○			○		
40	朝日向台古墳群					○			88	北ノ原第1遺跡		○					
41	長者屋敷跡						○	○	89	稲荷久保古墳群					○		
42	別府台遺跡		○	○	○	○	○		90	中愛宕台遺跡		○			○	○	
43	房平遺跡		○			○	○		91	道祖神前遺跡		○			○	○	
44	桃山遺跡							○	92	道辺台地遺跡						○	
45	矢萩台遺跡		○			○	○	○	93	道辺台地古墳群					○		
46	下南下遺跡					○			94	堀ノ内台遺跡						○	
47	下別府曾根遺跡					○			95	大塚古墳群					○		
48	曾根遺跡					○	○		96	地藏下遺跡					○		

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
97	根本打遺跡				○	○		107	塙台遺跡		○		○			
98	根本打古墳群				○			108	北原貝塚		○		○			
99	愛宕塚古墳				○			109	寺台遺跡				○			
100	スクボ塚							110	薬師久保遺跡		○					○
101	羽山遺跡							111	スカキ台遺跡		○	○	○			
102	中畑馬場中遺跡							112	吾妻台遺跡					○	○	
103	メミヤウ遺跡							113	天王峰遺跡(古墳1住居址)			○				
104	諏訪山遺跡							114	清原台遺跡		○		○			
105	七曜城跡							115	戸崎遺跡		○			○		
106	七曜塚															○



第2図 与曾内遺跡調査区設定図（龍ヶ崎市都市計画図 1/2,500）

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

与曾内遺跡は、龍ヶ崎市の東部に位置し、利根川低地に面した標高 25m の台地縁辺部に立地している。遺跡の地形は、樹枝状に開析された南北 100m、東西 150m の狭小な台地である。この台地の範囲は、当遺跡の範囲にほぼ相当する。今回発掘調査した地点は、遺跡範囲の南東部の縁辺部分に当たり、南側は崖となっている。調査面積は 475㎡で、調査前の現況は畑地・山林・塚である。

調査の結果、竪穴建物跡 1 棟（奈良時代）、掘立柱建物跡 2 棟（江戸時代）、塚 1 基（江戸時代）、墓坑 3 基（江戸時代）、土坑 1 基（江戸時代）、ピット群 2 か所（弥生時代、江戸時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 5 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（甕）、須恵器（坏）、瓦質土器（火鉢）、陶器（碗・蓋・皿・鉢・土瓶・播鉢・德利・燭台）、磁器（碗・猪口・皿・瓶）、石器・石製品（砥石・石臼）、金属製品（吸口）、銭貨、ガラス製品（点眼瓶）、自然遺物（人骨）などである。

## 第2節 基本層序

調査区北東部の台地上の平坦面に設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。

第1層は、暗褐色を呈する表土で、耕作土である。粘性・締まりともに弱い。層厚は 25～50cm である。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。締まりが弱い。層厚は 15cm ほどである。

第3層は、褐色を呈するハードローム層である。色調は、第2層に比して明るい。層厚は 15～30cm である。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、赤色・黒色スコリアを微量含む。層厚は 30～35cm である。

第5層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、赤色・黒色スコリアを微量含み、粘性が強い。層厚は 20～35cm である。

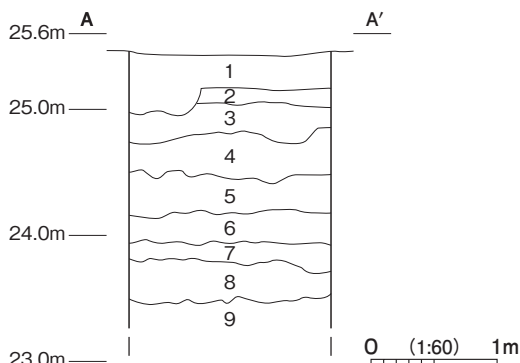
第6層は、暗褐色を呈するハードローム層である。赤色・黒色スコリアを微量含む。層厚は 25cm ほどである。第4～6層中には、第2黒色帯が含まれている可能性がある。

第7層は、褐色を呈するハードローム層である。赤色・黒色スコリアを微量含み、粘性が強い。層厚は 10～25cm である。

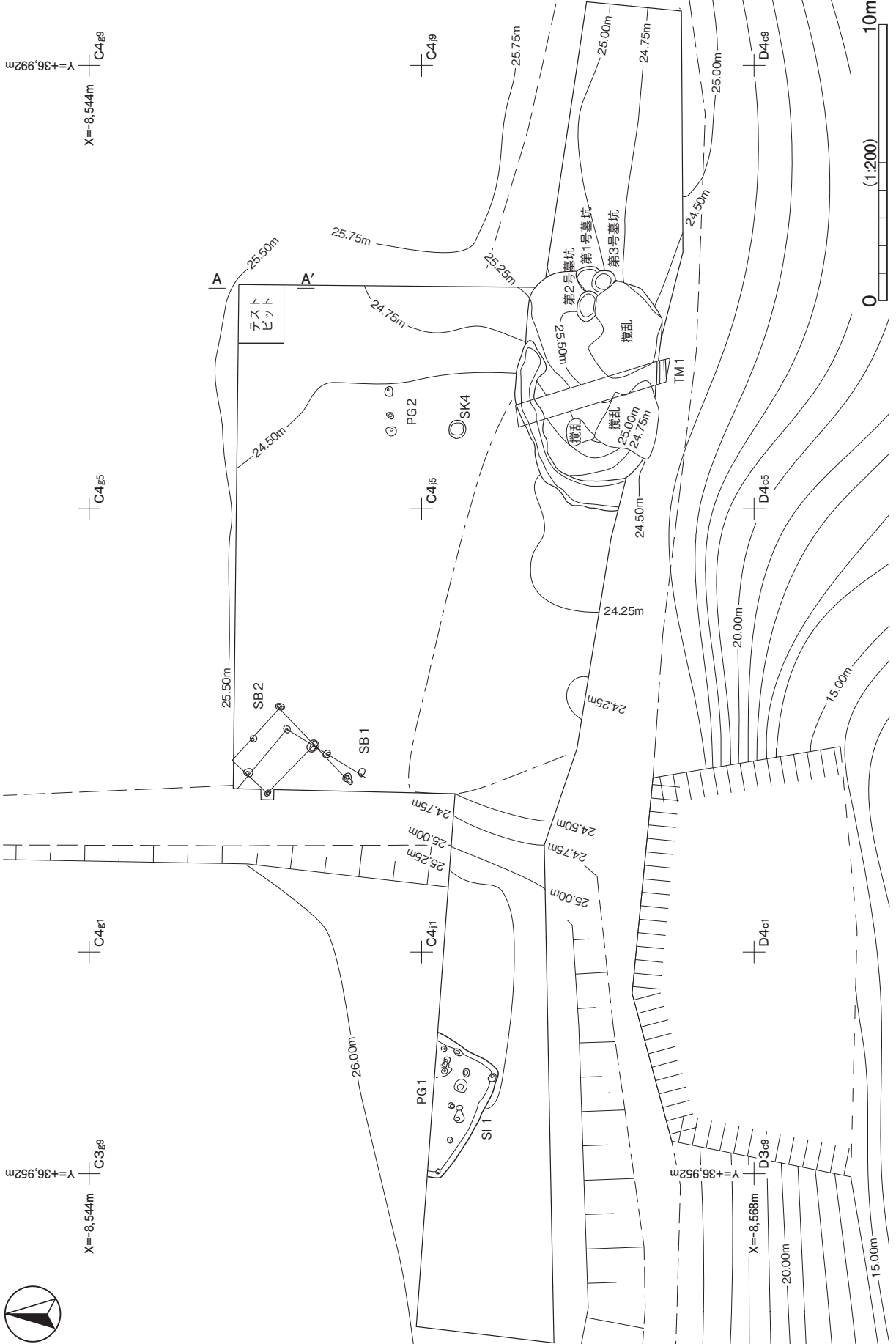
第8層は、暗褐色を呈するハードローム層である。締まりが強い。層厚は 20～35cm である。

第9層は、暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強い。

遺構は、第2層の上面で確認した。



第3図 基本土層図



第4図 与曾内遺跡遺構全体図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、ピット群を1か所確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### 第1号ピット群(第5・6図 PL 3)

**位置** 調査区西部のC3j9区、標高25mの台地上に位置している。

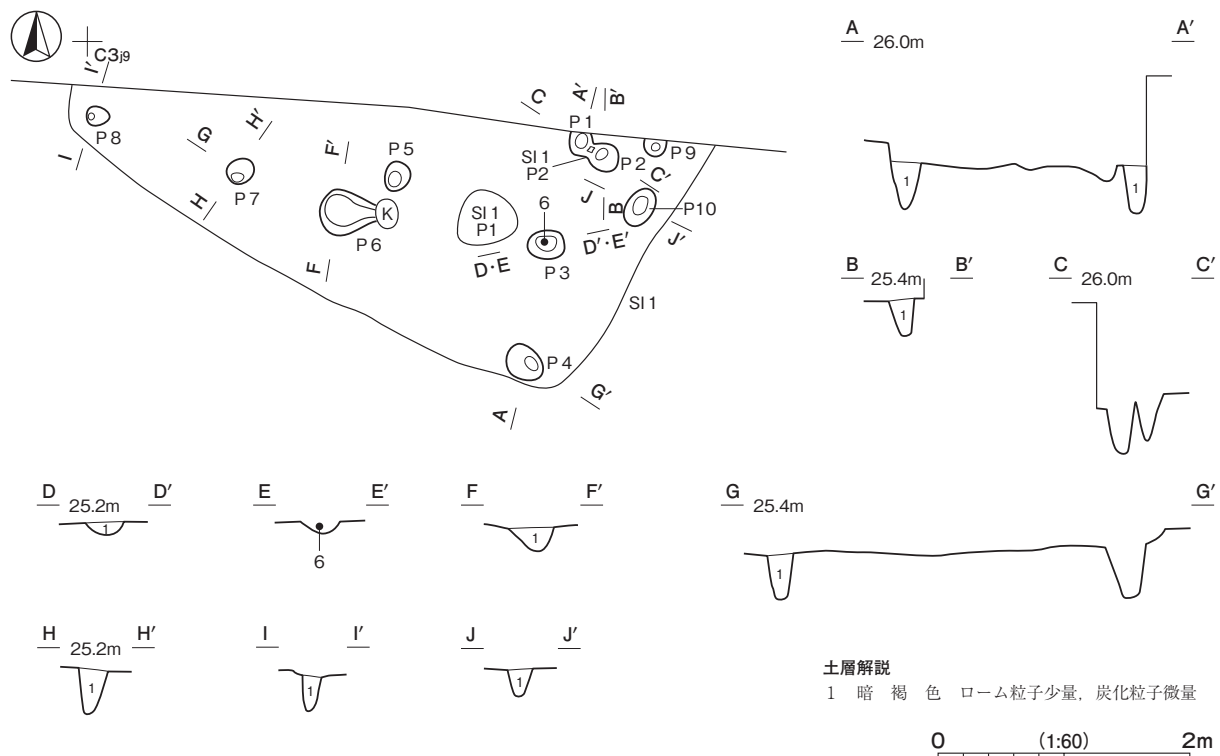
**重複関係** 第1号竪穴建物に掘り込まれている。

**規模と形状** ピットの平面形は円形または楕円形で、規模は長径17～44cm、短径13～36cm、深さは11～51cmである。各ピットの詳細な規模については計測表を参照されたい。

**覆土** 単一層である。

**遺物出土状況** ピットから弥生土器片9点(壺)が出土している。内訳は、P1の1点、P3の8点である。他に、重複する第1号竪穴建物跡から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から弥生時代後期後葉と考えられる。



第5図 第1号ピット群実測図

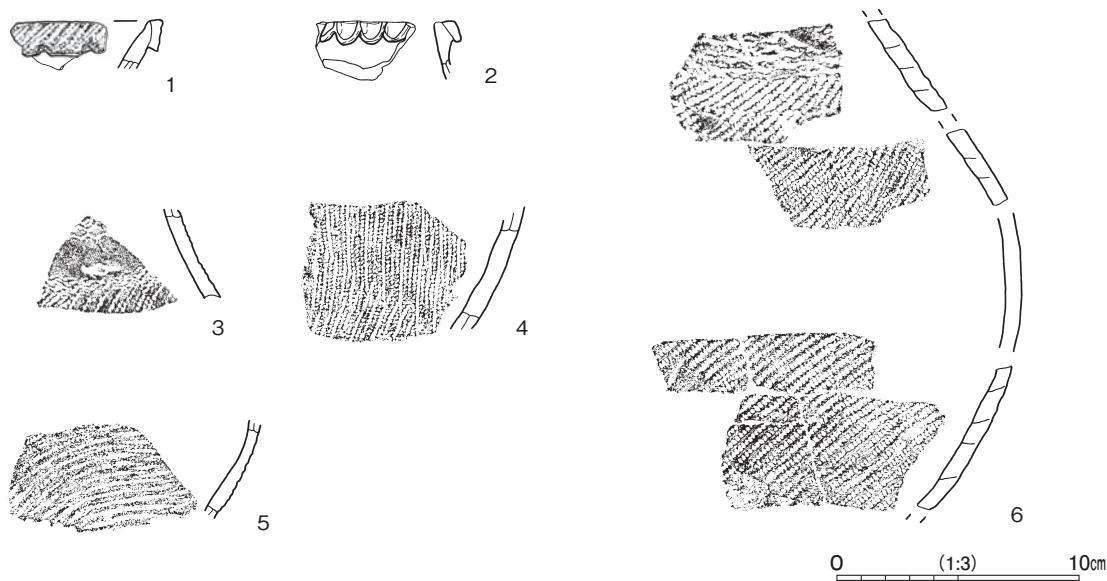
第1号ピット群計測表

ピット番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	C3j9	[円形]	(20)	19	39
2	C3j9	[楕円形]	(26)	22	30
3	C3j9	楕円形	30	23	11
4	C3j9	楕円形	31	25	42

ピット番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
5	C3j9	楕円形	25	20	51
6	C3j9	[楕円形]	(44)	36	20
7	C3j9	円形	21	20	36
8	C3j9	楕円形	19	15	28

ピット番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
9	C3j9	[楕円形]	17	(13)	22
10	C3j9	楕円形	32	26	24





第6図 第1号ピット群出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表 (第6図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい赤褐	折返し下端に刻み 附加条1種	SI 1 覆土中	PL 4
2	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	隆帯指頭による刻み	SI 1 覆土中	PL 4
3	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	附加条1種。	SI 1 覆土中	PL 4
4	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	附加条1種	SI 1 覆土中	PL 4
5	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	附加条1種	SI 1 覆土中	PL 4
6	弥生土器	壺	長石・石英	橙	縄文LR粘土紐積み上げ痕明瞭 粘土紐は幅約1.3cm	P 3 覆土中 SI 1 覆土中	PL 4

## 2 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

### 第1号竪穴建物跡 (第7図 PL 1)

**位置** 調査区西部のC 3j9区、標高25mの台地上に位置している

**重複関係** 第1号ピット群を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北部は調査区外へ延びているため、長軸とみられる北・南軸は2.39m、東・西軸は4.62mしか確認できなかった。方形と推測され、推定主軸方向はN - 32° - Eである。壁は高さ40cmで、直立している。

**床** 平坦で、中央部から南壁際が踏み固められている。

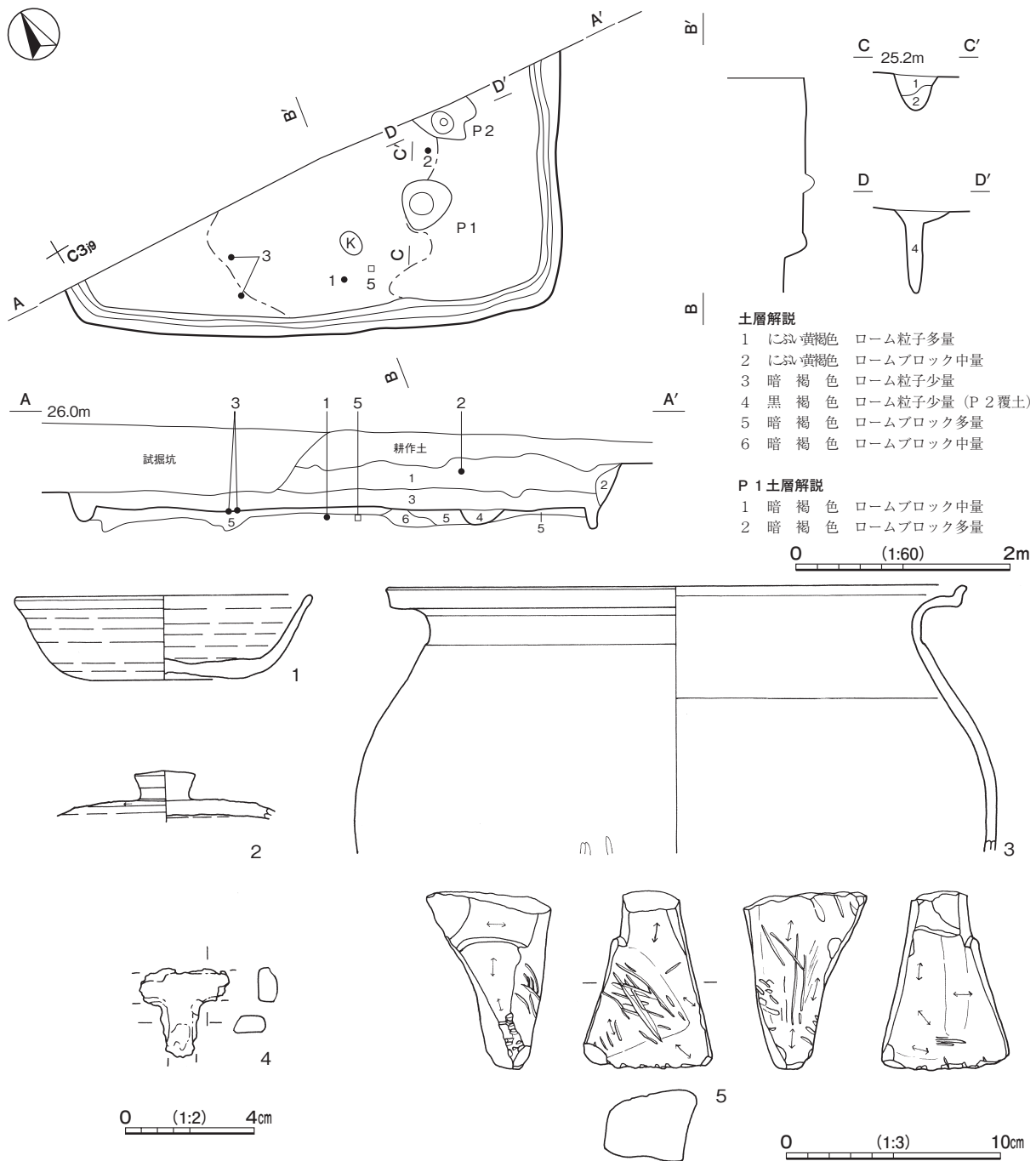
**ピット** 2か所。P 1は、径46cmの円形で深さ30cmである。深さは浅いが、配置から支柱穴と考えられる。

P 2は、長軸60cmの不定形に10cm掘り込まれた位置から、径20cmで深さ60cm掘り込まれている。

**覆土** 6層に分層できる。第1～4層はピットを含む覆土で、第5・6層は掘方の埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片77点(坏2, 甕75), 須恵器片7点(坏5, 蓋1, 甕1), 石器1点(砥石), 金属製品1点(刺金)のほか、縄文土器片1点(深鉢), 弥生土器片97点(壺)が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第7図 第1号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[13.8]	3.9	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子・針状鉱物	灰黄	普通	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	第3層中	40% PL 4 産地不明
2	須恵器	蓋	-	(2.4)	-	長石・石英・黒色粒子	浅黄	普通	天井部回転ヘラ削り	第1層中	5% 産地不明
3	土師器	甕	[26.8]	(12.4)	-	長石・石英・雲母	におい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部磨き	第3層中	15% PL 4
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
4	刺金	(2.7)	(2.8)	0.6	(8.1)	鉄	鍛接		覆土中	PL 8	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
5	砥石	8.3	6.0	5.8	191.9	凝灰岩	折れ面あり		第3層中	PL 8	

### 3 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡2棟、塚1基、墓坑3基、土坑1基、ピット群1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

#### (1) 掘立柱建物跡

##### 第1号掘立柱建物跡 (第8図 PL 3)

**位置** 調査区北西角部のC 4 h2～C 4 i2区、標高 24.5 mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第2号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

**規模と形状** 桁行2間3.14m以上、梁行1間2.12m以上の側柱建物跡で、調査区域外へ延びている。主軸は桁行方向N-32°-Eである。柱間寸法は、桁行で1.70m, 1.44mと一定していない。

**覆土** 単一層である。ロームブロック主体土で埋め戻されている。

**遺物出土状況** P4の覆土中から肥前系の磁器碗片1点が出土している。小片のため図示できなかった。

**所見** 時期は、出土磁器から江戸時代以降と考えられる。

##### 第2号掘立柱建物跡 (第9図 PL 3)

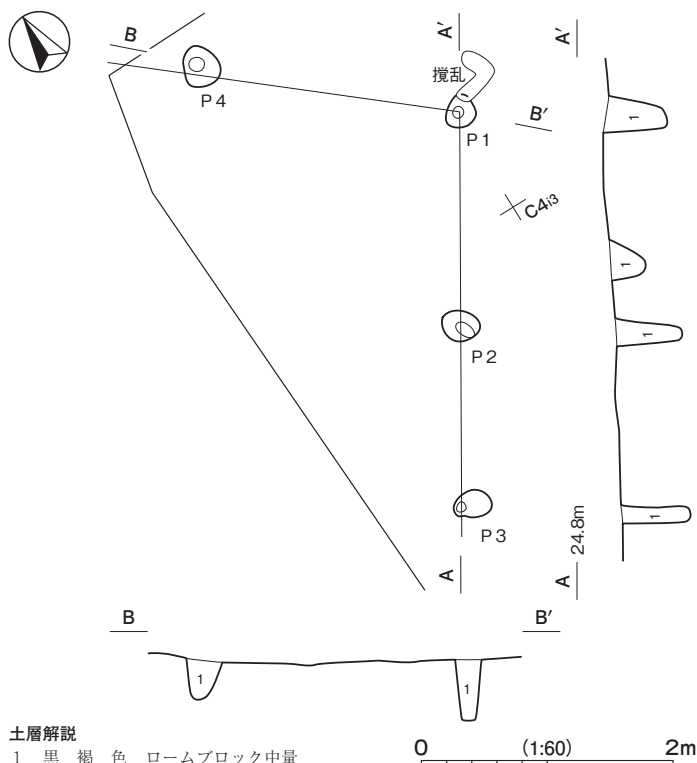
**位置** 調査区北西角部のC 4 h2～C 4 h3区、標高 24.5 mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

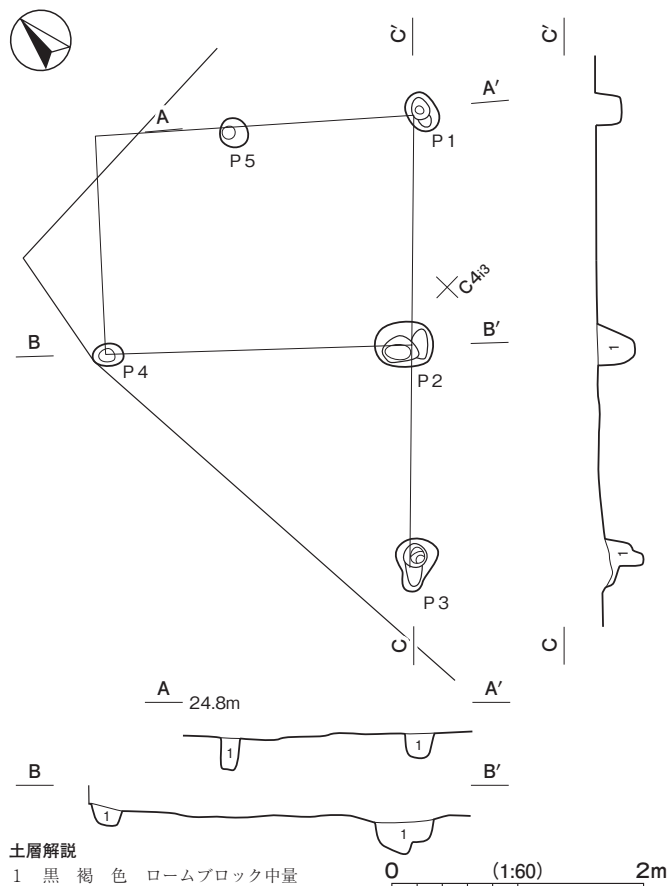
**規模と形状** 桁行2間3.60m以上、梁行1間1.50m以上の側柱建物跡で、調査区域外へ延びている。主軸は桁行方向N-46°-Eである。柱間寸法は、桁行で1.85m, 1.75mと一定していない。梁行は2.05mである。

**覆土** 単一層である。ロームブロック主体土で埋め戻されている。

**所見** 時期は、重複する第1号掘立柱建物跡と関連するとみられることから、江戸時代以降と推測される。



第8図 第1号掘立柱建物跡実測図



第9図 第2号掘立柱建物跡実測図

表5 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱穴				出土遺物	時期	備考
						桁×梁(間)	桁×梁(m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁間(m)	梁間(m)	構造			
1	C4h2～i2	N-32°-E	2以上×1以上	3.14×2.12	-	1.44～1.70	2.12	側柱 <sub>ナ</sub>	4	方形 <sub>ナ</sub>	33～55	P4磁器	江戸時代以降 <sub>ナ</sub>	
2	C4h2～h3	N-46°-E	2以上×1以上	3.60×1.50	-	1.75～1.85	1.50	側柱 <sub>ナ</sub>	5	方形 <sub>ナ</sub>	15～31	-	江戸時代以降 <sub>ナ</sub>	

(2) 塚

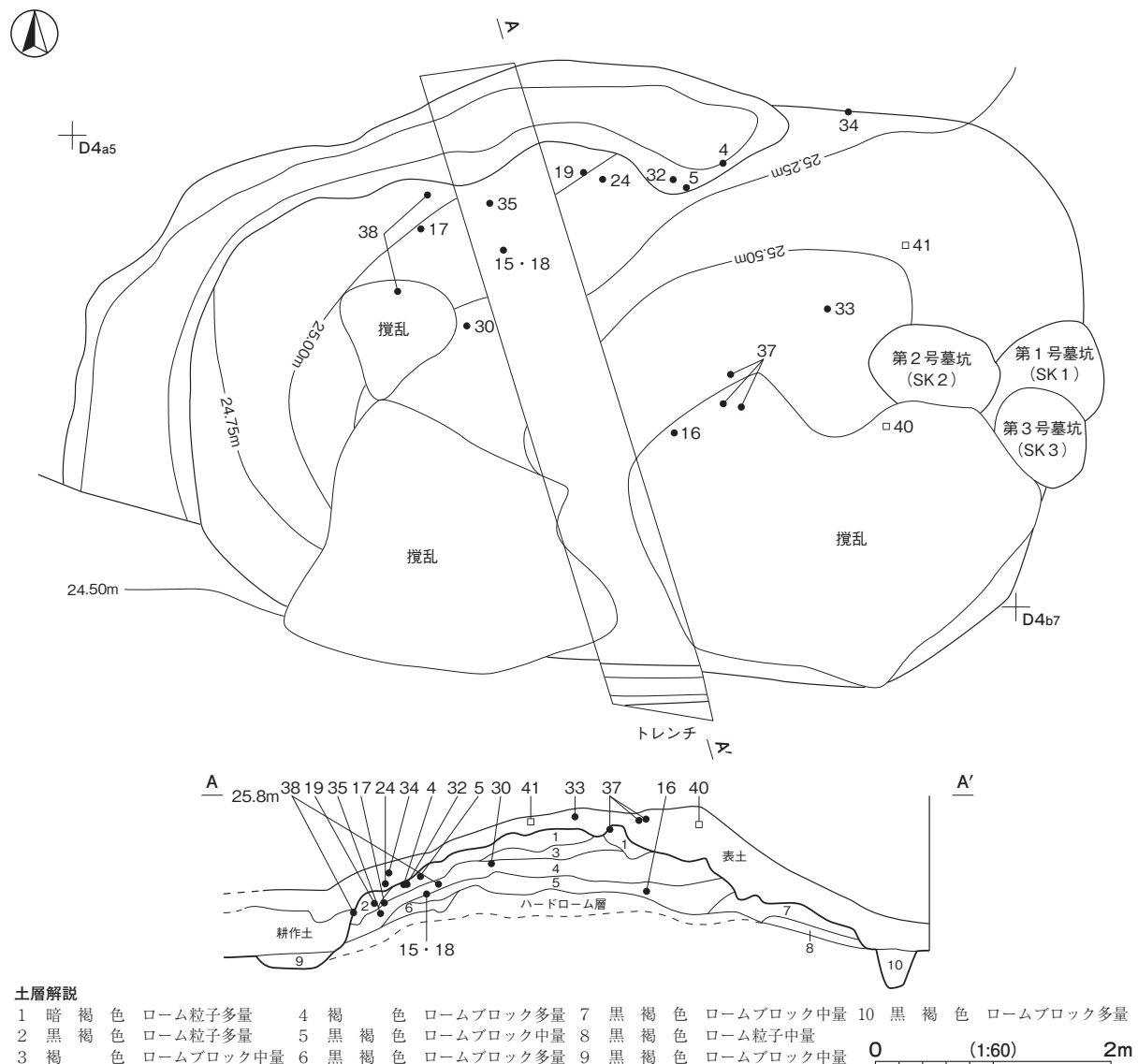
第1号塚 (第10～12図 PL3)

位置 調査区南東部のC4j5～D4a7区、標高25mの台地縁辺部に位置している。

確認状況 調査前の段階で、頂部に石造物が4基祀られていた。石造物については、調査開始前に100mほど西に所在する鹿島神社境内へ移設されている。

重複関係 盛土除去後に、第1～3号墓坑を確認したため、塚盛土との新旧関係は不明である。

規模と形状 塚部は長径7.66m、短径4.62mの楕円形で、長径方向はN-75°-Eで、基底部から表土までの盛土高は1mである。塚部の外周に溝が掘り込まれている。北側は耕作により削平されているため、塚を全



第10図 第1号塚実測図

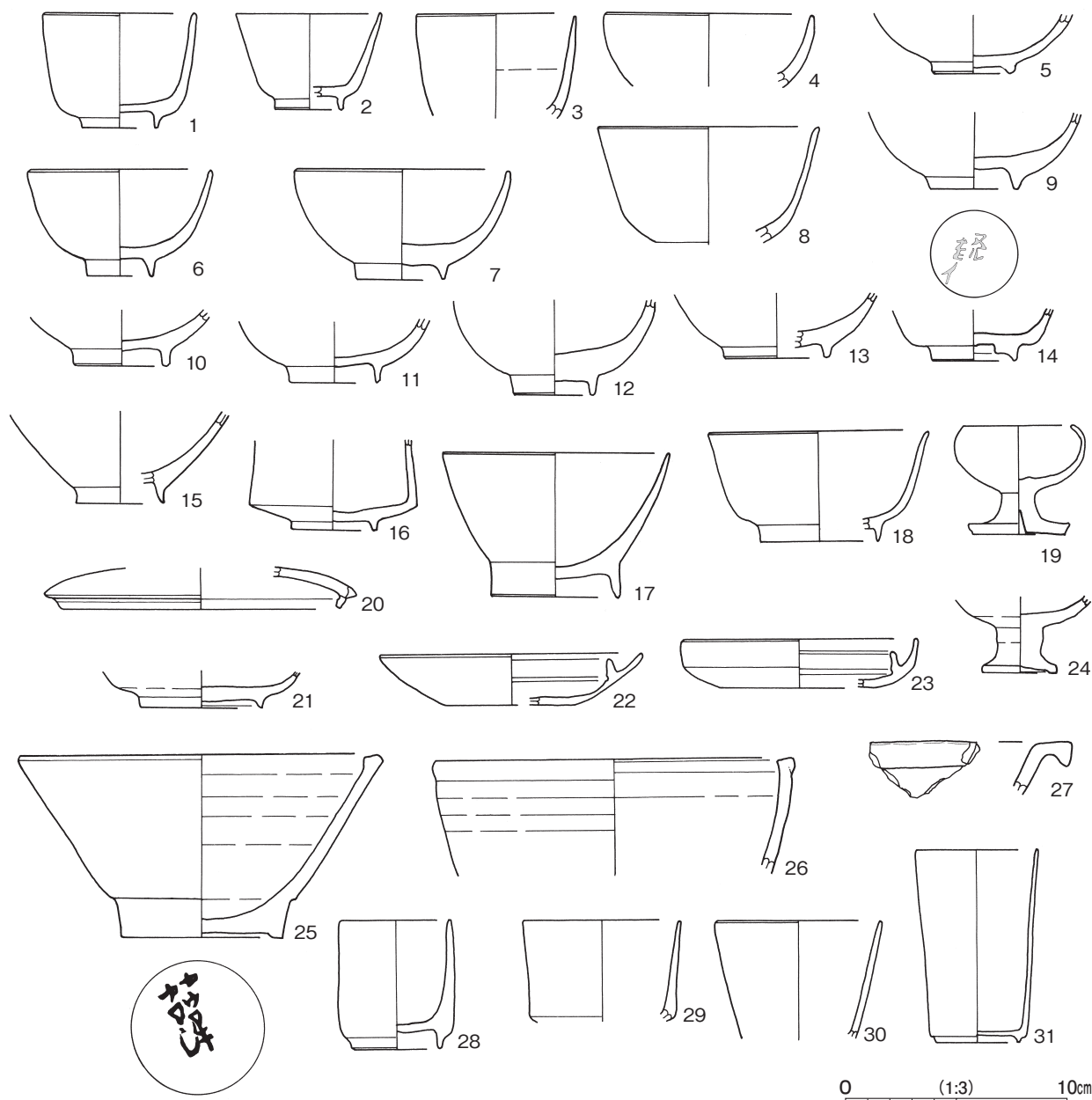
周していたか不明である。溝は、幅 0.3～0.4m、深さ 15～35cm で、壁は外傾している。

**塚盛土** 8層に分層できる。構築土の上層は暗褐色土で、中～下層はロームブロックを多く含んだ褐色土で、締まりは弱い。基底層はハードローム層まで削って整地されている。塚の北側は、耕作により削平されている。

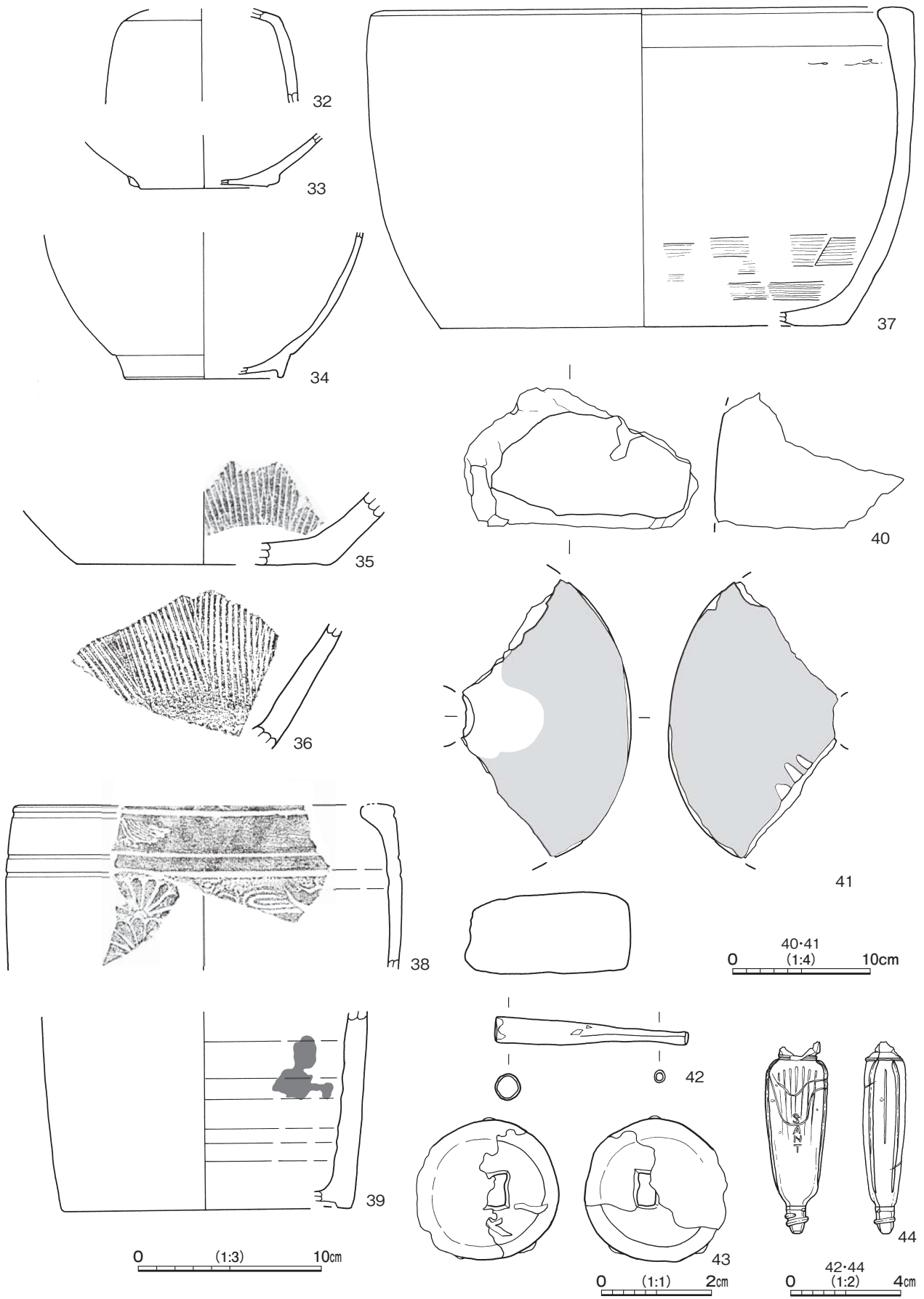
**溝覆土** 2層に分層できる。締まりが弱いことから、崩落土によって埋まったものと考えられる。

**遺物出土状況** 土師質土器片 12点 (皿2, 鉢6, 鍋2, 焙烙1, 火消壺1), 瓦質土器片 9点 (火鉢), 陶器片 21点 (碗3, 灯明受皿2, 蓋1, 鉢5, 播鉢2, 土瓶1, 徳利1, 瓶1, 甕4, 乗燭1), 炆器片 9点 (土瓶1, 瓶1, 播鉢6, 火鉢1), 磁器片 45点 (小坏1, 碗33, 皿4, 猪口2, 水注1, 瓶2, 仏飯器1, タンブラー1), 石器 1点 (石臼), 石製品 1点 (石造物片), 金属製品 2点 (吸口, 不明), 銭貨 1点 (寛永通寶カ), ガラス製品 1点 (点眼瓶), 瓦片 8点のほか、縄文土器片 1点 (深鉢), 弥生土器片 1点 (壺), 土師器片 7点 (甕), 須恵器片 1点 (蓋) が出土している。遺物は、塚盛土の北側から多く出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 18世紀以降と考えられる。



第 11 図 第 1 号塚出土遺物実測図(1)



第12図 第1号塚出土遺物実測図(2)

第1号塚出土遺物観察表 (第11・12図 PL 5～8)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴			釉薬	産地	出土位置	備考
1	磁器	小碗	6.8	5.2	3.4	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 腰張り 口縁部外面圈線文・内面二重圈線文 体部外面松原文 腰部・高台脇・高台圈線文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	100% 1800～1860
2	磁器	小碗	[6.6]	4.3	[3.0]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 端反形 口縁部外面圈線文 体部外面水仙文。 高台脇二重圈線文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	50% 1800～1860
3	磁器	小碗	[7.2]	(4.7)	-	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 腰張り。 体部外面丸文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	15% 1800～1860
4	磁器	中碗	[9.4]	(3.3)	-	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 丸形 くらわんか手 体部外面草花文。			透明釉	肥前系	表土	25% 1690～1750
5	陶器	碗	-	(2.7)	3.4	長石・石英 黄褐	ロクロ成形 削り高台 丸形 体部外面鐙手 内外面釉掛け分け 畳付無釉			緑釉 灰釉	瀬戸・美濃系	表土	20% 1770～1840
6	磁器	小碗	[8.2]	4.8	3.0	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 口縁部外面圈線文 体部外面寿字文 窓に唐草文と松に寿字文 高台二重圈線文 高台内面圈線文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	20% 1800～1860
7	磁器	中碗	[9.6]	5.0	4.0	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 丸形 くらわんか手 体部外面草花文 腰部圈線文 高台二重圈線文 高台内草文 畳付無釉			透明釉	肥前系	表土	50% 1690～1750
8	磁器	中碗	[10.0]	(5.3)	-	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 端反形 口縁部外面圈線文・内面連弧文重ね 体部外面蓮弁文 腰部・見込圈線文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	10% 1800～1860
9	磁器	碗	-	(3.5)	4.0	緻密 灰白	染付 削り高台 体部外面草文 腰部蹄歯文 見込圈線文に寿字文 高台圈線文 高台内朱書「ヌルイ」 白玉焼き継ぎ			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	20% 1800～1860
10	磁器	碗	-	(2.6)	4.4	緻密 灰白	ロクロ成形 銅版転写 削り高台 体部外面草花文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	40% 1800～1860
11	磁器	碗	-	(2.9)	[4.0]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 体部外面草文 腰部・高台脇二重圈線文 見込二重圈線文に草花文。 高台圈線文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	10% 1800～1860
12	磁器	碗	-	(4.3)	[3.6]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 丸形 くらわんか手 体部外面草花文 見込目痕2 高台脇圈線文 高台二重圈線文 畳付無釉			透明釉	肥前系	表土	30% 1690～1750
13	磁器	碗	-	(3.0)	[4.8]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 丸形。 くらわんか手 体部外面草花文。 腰部圈線文 高台二重圈線文			透明釉	肥前系	表土	20% 1690～1750
14	磁器	碗	-	(2.3)	3.9	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 蛇の目凹型高台 腰張り。 見込銘「酒類販売 ヤマ西」			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	20% 1800～1860
15	磁器	碗	-	(4.2)	[4.0]	緻密 灰白	ロクロ成形 削り高台 平形。			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	10% 1800～1860
16	磁器	小碗	-	(4.1)	[3.6]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 半筒形 体部外面半菊文カ腰部・高台脇・高台圈線文 見込圈線文に五弁花文			透明釉	肥前系	表土	20% 1750～1780
17	磁器	中碗	[10.2]	6.5	5.8	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 広東形 口縁部内面二重圈線文 体部外面草花文 見込圈線文に鳥文 見込目痕2 高台二重圈線文			透明釉	肥前系	表土	40% 1780～1840
18	磁器	中碗	[10.0]	5.0	[5.4]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 端反形 口縁部外面圈線文・内面帯線文 体部外面梅文。 腰部・高台脇・高台圈線文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	15% 1800～1860
19	陶器	乗燭	[5.0]	4.9	4.2	緻密 におい黄橙	ロクロ成形 台付たんころ形 底部右回転糸切 底部軸孔有			鉄釉	瀬戸・美濃系	表土	70% 1770～1840
20	陶器	蓋	[12.6]	(1.9)	-	長石 黄褐	ロクロ成形 口受有 口受無釉 蓋外面草文。			灰釉	瀬戸・美濃系	表土	5%
21	磁器	皿	-	(1.7)	5.5	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 見込楼閣山水文 畳付無釉			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	30% 1800～1860
22	陶器	灯明受皿	[11.8]	2.3	[6.0]	長石・石英 におい黄橙	ロクロ成形 ベタ底 油溝切立状 体部外面下部から底部釉拭い取り 体部外面下部重ね焼き痕			鉄釉	瀬戸・美濃系	表土	10%
23	陶器	灯明受皿	[10.6]	2.2	[7.0]	長石・石英 におい黄橙	ロクロ成形 油溝切立状 体部外面下部釉拭い取り 体部外面下部重ね焼き痕			鉄釉	瀬戸・美濃系	表土	20%
24	磁器	仏飯器	-	(3.5)	3.4	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 台底輪高台 半磁半陶 脚部鋸子状跡一対有 高台無釉			透明釉	肥前系	表土	60% 1690～1790
25	陶器	中鉢	16.2	8.3	7.3	長石・石英 浅黄橙	ロクロ成形 削り高台 碁笥底 腰折形 見込目痕3 高台内墨書「詰碑」			灰釉	瀬戸・美濃系	表土	60%
26	陶器	鉢	[16.3]	(5.2)	-	長石・石英 におい黄橙	ロクロ成形 玉縁口縁			灰釉	瀬戸・美濃系	表土	5% 片口カ 1710～1750
27	陶器	鉢	-	(2.5)	-	長石・石英 におい黄橙	ロクロ成形 折縁口縁 銅緑釉流し掛け。			灰釉	瀬戸・美濃系	表土	5% 笠原鉢カ
28	磁器	小坏	[5.0]	5.8	[3.9]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 削り高台 半筒形 体部外面草花文 高台脇・高台帯線文 高台内角福銘			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	30% 1800～1860
29	磁器	猪口	[7.2]	(4.6)	-	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 桶形 口縁部外面圈線文 内面四方標文 体部外面山文に網干文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	10% 1800～1860
30	磁器	猪口	[7.6]	(5.4)	-	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 桶形 体部外面楡垣文			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	20% 1800～1860
31	磁器	タンブラー	5.6	8.9	3.7	緻密 灰白	型押。 金彩 体部外面葉文 高台内銘「宋山」。			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	99% 近現代
32	陶器	徳利	-	(5.2)	-	長石・石英・黒色 斑点 におい黄橙	ロクロ成形 撫肩形 内面無釉			灰釉	瀬戸・美濃系	表土	5% 1770～1800
33	陶器	土瓶	-	(2.9)	[7.0]	緻密 におい黄橙	ロクロ成形 体部外面下部から底部・内面無釉 足貼付 底部煤付着			鉄釉	在地。	表土	10%
34	磁器	大瓶	-	(8.0)	[8.4]	緻密 灰白	ロクロ成形 染付 隼形。 削り輪高台 体部外面・高台圈線文 体部内面・畳付無釉			透明釉	瀬戸・美濃系	表土	10% 1800～1860
35	炆器	播鉢	-	(4.0)	[14.0]	長石・石英 におい黄橙	ロクロ成形 ベタ底 櫛目9本1単位 見込櫛目三角			-	明石・堺系	表土	10% 1750～1800
36	陶器	播鉢	-	(6.8)	-	長石・石英 におい黄橙	ロクロ成形 体部外面釉拭い取り 櫛目14本1単位			鉄釉	瀬戸・美濃系	表土	10% 1700～1800
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
37	土師質土器	火消器	[29.8]	17.3	22.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい黄橙	普通	摩滅顕著 内面刷毛目	表土	30%		
38	瓦質土器	火鉢	[20.8]	(9.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒	普通	印刻菊花文	表土	10%		
39	瓦質土器	火鉢	-	(10.8)	[16.0]	長石・雲母	褐灰	普通	鱗文様の印刻。 表面剥落顕著	表土	5%		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考		
40	石造物	(10.1)	(16.9)	(14.1)	(1996.4)	安山岩	加工面が1面のみ確認できる 他折損 石造物片とみられる			表土			
41	石臼	(19.9)	(12.3)	5.8	(1606.8)	安山岩	磨り面摩滅顕著で溝はない 両面摩滅 下臼			表土			
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考		
42	吸口	7.0	0.9	0.1	6.68	銅	鑄造。			表土			
番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴			出土位置	備考	
43	寛永通寶。	2.6	0.6	0.1	(3.56)	鉄	1739	新寛永。 銹化顕著			表土		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考		
44	点眼瓶	(7.0)	2.2	1.5	(15.48)	ガラス	器厚0.2～0.3cm 孔径0.3cm 参天製薬両口式点眼瓶			表土	昭和6～37年頃		

### (3) 墓坑

土坑として調査したSK 1～3号の土坑3基について、人骨が出土したことから墓坑として扱い報告する。いずれも塚の盛土を除去後に検出したが、塚の盛土との関係を確認する土層を設定していないため、重複関係は不明である。遺構番号については、振替はせず、国立科学博物館に保管されている出土人骨資料と一致させている。

3基の墓坑は重複していることから、遺構実測図はまとめて提示する。以下、遺構ごとに記述する。

#### 第1号墓坑 (SK 1) (第13・14図 PL 2)

**位置** 調査区南東部のD 4 a7区、標高25mの台地上に位置している。

**重複関係** 第2号墓坑に掘り込まれ、第3号墓坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径0.93m、短径は0.76mの楕円形と推測され、長径方向はN-73°-Eである。深さは11cmで、底面は平坦である。

**覆土** 2層に分層できる。ともにロームブロック主体土で埋め戻されている。

**埋葬の状況** 頭蓋を西として左右四肢骨が平行に出土している。

**遺物出土状況** 平行する下肢骨の間から、銭貨6枚（鉄銭3、銅銭3）が出土している。

**人骨** 年齢は、頭蓋縫合などから比較的高齢の成人で、四肢骨の長さ・太さから男性の可能性を指摘されている。

**所見** 時期は、出土銭貨から18世紀以降と考えられる。

#### 第2号墓坑 (SK 2) (第13・14図 PL 2)

**位置** 調査区南東部のD 4 a6区、標高25mの台地上に位置している。

**重複関係** 第1号墓坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.11m、短径は0.66mの楕円形で、長径方向はN-77°-Eである。深さは27～33cmで、底面は傾斜している。

**覆土** 単一層である。ロームブロック主体土で埋め戻されている。

**埋葬の状況** 下肢骨が直立して出土していることから、埋葬姿勢は、立膝座位と推測される。

**遺物出土状況** 下肢骨の間から、銭貨6枚（銅銭）が出土している。

**人骨** 年齢は、比較的高齢の成人で、寛骨から男性と指摘されている。

**所見** 時期は、出土銭貨から18世紀以降と考えられる。

#### 第3号墓坑 (SK 3) (第13図 PL 2)

**位置** 調査区南東部のD 4 a7区、標高25mの台地上に位置している。

**重複関係** 第1号墓坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径0.90m、短径は0.69mの楕円形で、長径方向はN-32°-Eである。深さは40cmで、底面は平坦である。

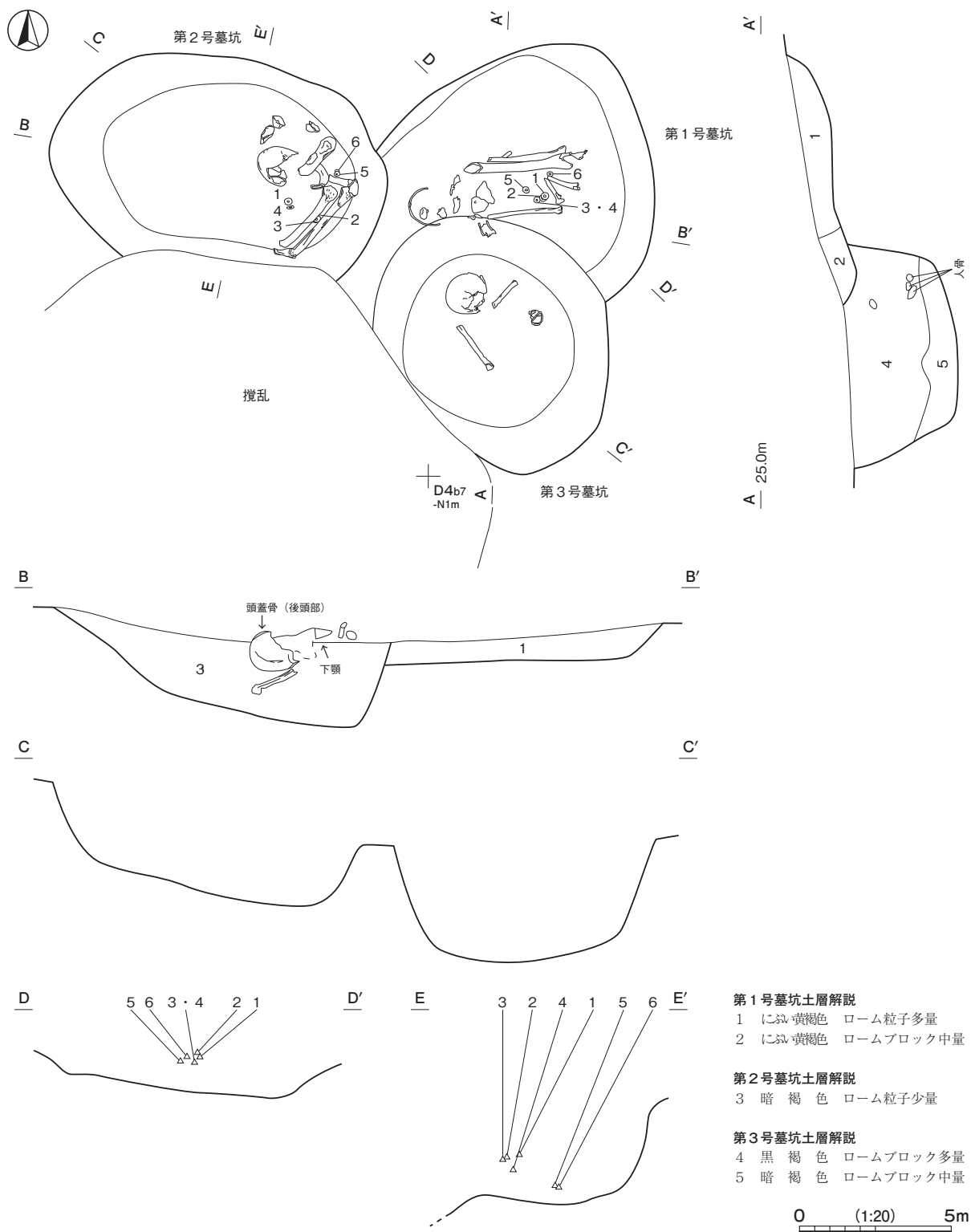
**覆土** 2層に分層できる。ともにロームブロック主体土で埋め戻されている。

**埋葬の状況** 下肢骨が直立して出土していることから、埋葬姿勢は、立膝座位と推測される。

**人骨** 年齢は、老年で、寛骨から男性と指摘されている。

**所見** 時期は、推定できる出土遺物はないが、重複する第1号墓坑が18世紀以降であることから、これよりもやや古い時期と考えられる。

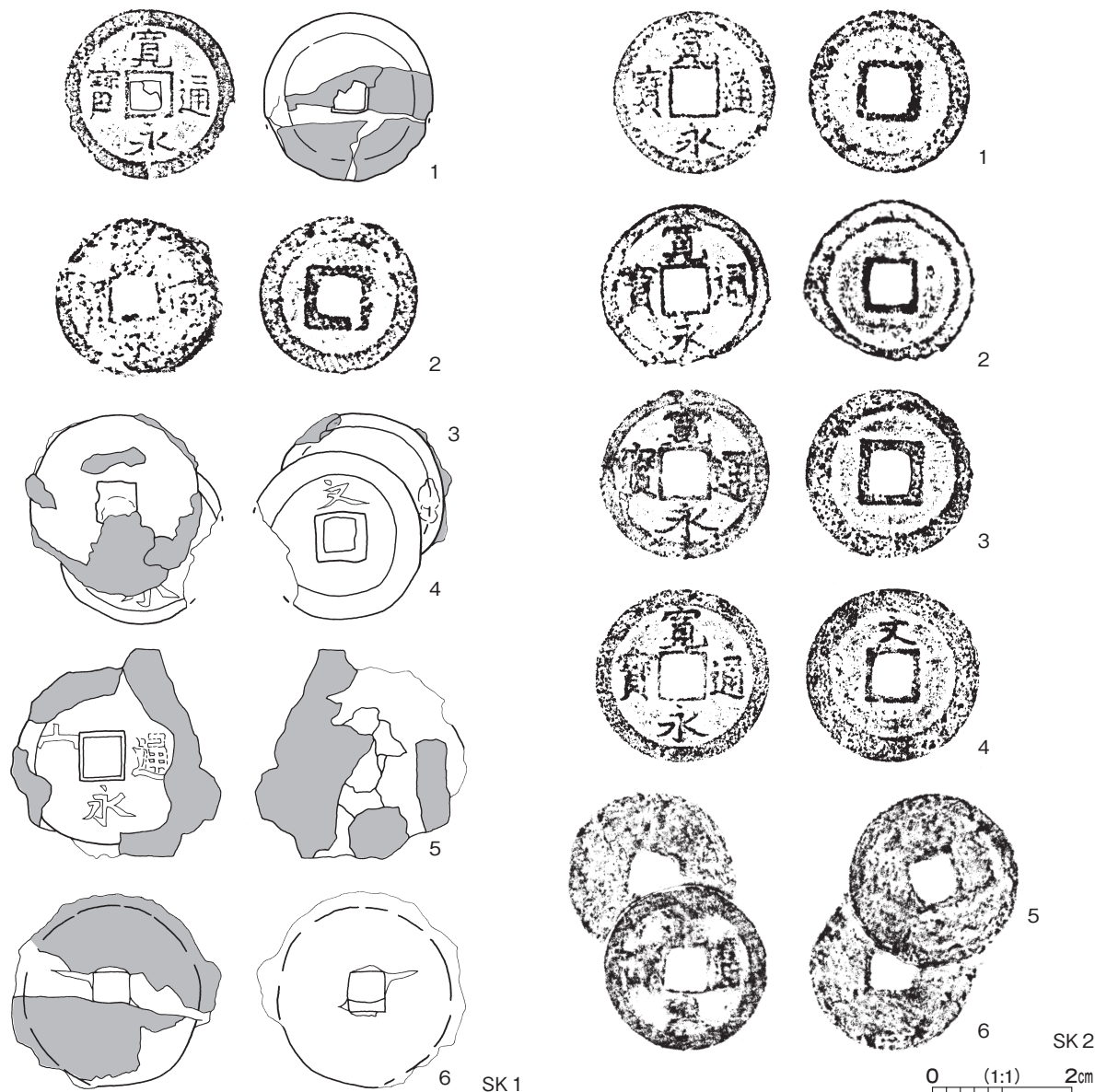




第13図 第1～3号墓坑実測図

表2 江戸時代墓坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	D4a7	N - 73° - E	[楕円形]	(0.93) × (0.76)	11	平坦	緩斜	人為	銭貨 人骨	本跡→SK 2
2	D4a6	N - 77° - E	[楕円形]	1.11 × (0.66)	27 ~ 33	傾斜	外傾	人為	銭貨 人骨	
3	D4a7	N - 32° - E	楕円形	0.90 × (0.69)	40	平坦	外傾	人為	人骨	本跡→SK 1



第14図 第1・2号墓坑出土遺物実測図

第1号墓坑出土遺物観察表 (第14図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
1	寛永通寶	2.5	0.5	0.1	2.49	銅	1668	新寛永 背に布付着	覆土中	PL 8
2	寛永通寶	2.3	0.6	0.14	2.22	銅	1668	新寛永	覆土中	PL 8
3	寛永通寶	2.4	0.6	0.24	4.87	鉄	1739	表布付着 3-4と錆着	覆土中	PL 8
4	寛永通寶	2.4	0.5	0.13		銅	1668	新寛永 背「文」	覆土中	PL 8
5	寛永通寶	3.0	0.5	0.15	3.30	鉄	1739	新寛永 表背ともに布付着	覆土中	PL 8
6	寛永通寶	2.7	0.45	0.1	2.62	鉄	1739	鉄銭から寛永通寶と推測 片面に布付着	覆土中	PL 8

第2号墓坑出土遺物観察表 (第14図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
1	寛永通寶	2.4	0.6	0.97	1.66	銅	1668	新寛永	覆土中	PL 8
2	寛永通寶	[2.5]	0.6	1.39	2.74	銅	1668	新寛永	覆土中	PL 8
3	寛永通寶	2.5	0.6	1.29	2.71	銅	1636	古寛永	覆土中	PL 8
4	寛永通寶	2.55	0.6	1.32	3.22	銅	1668	新寛永 背「文」	覆土中	PL 8
5	寛永通寶	2.5	0.5	1.43	5.85	銅	1668	新寛永 5-6と錆着	覆土中	PL 8
6	寛永通寶	2.6	0.5	1.39		銅	1668	新寛永	覆土中	PL 8

#### (4) 与曾内遺跡の出土人骨

国立科学博物館人類研究部  
中山なな・梶ヶ山真里・坂上和弘

##### 1 はじめに

茨城県龍ヶ崎市塗戸町に所在する与曾内遺跡では、2017年6月1日から6月30日にかけて発掘調査が行われ、江戸時代に帰属すると考えられる埋葬遺構3基（SK 1, SK 2, SK 3）から3体の成人骨が出土した。いずれも土葬墓で、「庚申塚」とよばれている塚の東側に位置する（第3章第3節(3)）。

これらの人骨を対象に、クリーニングおよび接着復元の後、残存部位の同定、死亡年齢推定と性別判定、そして形態学的観察を実施した。死亡年齢は、腸骨耳状面の形態変化（Buckberry and Chamberlain 2002）や骨端の癒合状況、骨棘形成の有無などから総合的に推定した。性別判定は、主に寛骨形態の観察による Bruzek（2002）の方法に基づくが、頭蓋形態や四肢骨の太さも参考とし、総合的に判断した。頭蓋と四肢骨の計測はマルチン式に従って行い（馬場 1991）、顔面平坦度は Yamaguchi（1973）に従って求めた。推定身長は藤井（1960）の推定式に基づき、左右の大腿骨と脛骨の最大長からそれぞれ求めた。さらにこれらの計測値を、江戸市中の甕棺墓集団（主に中・下級武士）と早桶集団（主に町人）の頭蓋計測値（Sakaue 2012）、江戸市中の東京都崇源寺跡（1次）出土人骨の四肢骨計測値（梶ヶ山ほか 2005）、江戸周辺村落の集団である山梨県米倉山 B 遺跡出土人骨の頭蓋・四肢骨計測値（平田・星野 1999）と比較した。

なお、本遺跡出土人骨は、国立科学博物館人類研究部に保管されている。また、埋葬遺構の詳細な位置や形態、副葬品などについては第3章第3節(3)を、埋葬遺構の歴史的背景については第3章第4節を参照されたい。

##### 2 人骨の所見

各個体の頭蓋の計測値を表3に、四肢骨の計測値と推定身長を表4に示した。以下、各個体の観察所見を述べる。

###### 第1号墓坑（SK 1）（成人／男性？）

主な残存部位は頭蓋、椎骨、四肢骨である。残存状態は概ね不良で、右上腕骨、右橈尺骨、右大腿骨は骨端部を欠き、その他の部位は小片である。

腸骨耳状面が残存していないため、詳細な死亡年齢推定はできないが、椎骨椎体における骨棘形成や頭蓋縫合の状態から、比較的高齢の成人であったと推測される。また性別は、寛骨が残存せず判定不能であるが、四肢骨の長さ・太さは男性的であることから、「男性？」と判定した。

頭蓋は、右頭頂骨、後頭骨、右側頭骨、右上顎骨の破片が残存する。矢状縫合は、外板・内板で一部閉鎖し、ラムダ縫合は外板では一部閉鎖、内板ではほぼ完全に閉鎖している。

残存歯は以下の通りである。

×××××△××	××××567×
××××××××	△×△△××××

（×：破損あるいは残存せず，△：遊離歯）

咬耗の程度は、概ね Smith（1984）の2～3である。上顎の臼歯部は、歯槽骨の退縮が著しく、歯根が4～6mm露出しており、比較的高齢であることを示唆している。

四肢骨の長さは、右橈骨を除き、破損により計測不能であった。上腕骨は、大結節稜・小結節稜が明瞭であるが、三角筋粗面はさほど発達していない。橈骨の最大長（推定 230mm）は、崇源寺跡（1次）出土の男性の平均値（220mm）を上回り、太さ（横径 16.2mm, 矢状径 11.4mm）は崇源寺跡（1次）男性の平均（横径 16.9mm, 矢状径 11.9mm）と同程度である。橈骨粗面の凹凸が明瞭であるが骨間縁の発達はやや弱い。尺骨の太さ（矢状径 12.8mm, 横径 16.8mm）は、崇源寺跡（1次）出土の男性の平均値（矢状径 11.8mm, 横径 16.1mm）を上回り、骨間縁も発達している。大腿骨は、中央矢状径 29.5mm, 中央横径 27.0mm で、崇源寺跡（1次）男性の平均（中央矢状径 26.7mm, 中央横径 26.3mm）に比べやや太い。大腿骨後面粗線は比較的発達しており、殿筋粗面の凹凸が明瞭である。

腰椎椎体の上面・下面は多孔質で、辺縁部には著しい骨棘形成が認められ、高齢であることを示唆している。

## 第2号墓坑（SK 2）（成人／男性，写真1・3・5）

主な残存部位は、頭蓋，四肢骨，寛骨，椎骨である。頭蓋の残存状態は比較的良好であるが、その他の部位は破損しており、残存状態は概ねやや不良である。

腸骨耳状面の破損により、詳細な死亡年齢は推定不能であるが、齒槽骨や椎骨の骨変化から、比較的高齢の成人であったと推測される。寛骨の形態は男性的である。

頭蓋は、大後頭孔周辺および顔面の左側を欠く。上面観は類五角形である。頭頂結節がやや発達し、後頭骨の後方への膨隆が顕著である。頭蓋長幅示数は 81.1 と短頭型に属する。これは、町人を主体とする江戸市中の早桶男性の平均（76）や、山梨県米倉山 B 遺跡の男性の平均（76.5）を上回り、江戸市中の中・下級武士を中心とする甕棺墓男性の平均（80）と同程度である。三主縫合は、外板・内板で部分的に閉鎖している。側面観では、眉弓がわずかに発達しており外後頭隆起は明瞭である。側頭線は不明瞭であるが、乳突上稜は明瞭である。後面観は円形に近く、ラムダ縫合にインカ骨が少なくとも 3 個認められる。上項線は比較的良好に発達している。前面観では、前頭結節の発達は弱く、眉弓は眉間付近でわずかに隆起する。

顔面では、眼窩の形態は円形に近い。推定眼窩示数は 76.9 と中眼窩で、江戸市中の早桶男性の平均値（79）に準ずる。鼻根部の幅（前眼窩間幅 19.7mm）は、江戸市中の早桶男性（16.9mm）よりやや広い。鼻根部はやや平坦な印象で、鼻骨平坦示数は 34.9 と早桶男性（34）とほぼ同程度である。

下顎は、左オトガイ孔から下顎枝にかけて大きく破損する。オトガイ隆起・オトガイ結節の発達はわずかである。下顎体は比較的薄く、下顎体高厚示数（36.4）は早桶男性の平均（42）を下回る。

残存歯は以下の通りである。

×○65432○	1○3○○○7×
×76543×○	○○○○○○○×

（○：死後喪失，齒槽開放）

咬耗の程度は、上顎では Smith の 2～3，下顎では犬歯・小臼歯で 2～3，大臼歯で 4～5 である。

左大腿骨最大長の推定値に基づく推定身長は 148.6cm で、江戸市中の男性（崇源寺跡 1次）の平均（154.5cm）や山梨県米倉山 B 遺跡の男性の平均（155.3cm）を大きく下回る。上腕骨および橈尺骨は、破損により計測値を得られなかった。上腕骨三角筋粗面の発達は弱いが、上腕筋が付着する尺骨粗面は凹凸が明瞭である。大腿骨最大長はおよそ 380mm で、崇源寺跡（1次）の男性の平均（403mm）を大きく下回る。中央矢状径（右 24.5mm, 左 25.1mm）・中央横径（右 27.5mm, 左 28.8mm）は、崇源寺跡（1次）の男性の平均（中央矢状径 26.7mm, 中央横径 26.3mm）と同程度である。大腿骨後面粗線の隆起は低く、殿筋粗面の凹凸は明瞭である。

脛骨は偏平で（脛示数：左 59.5, 右 60.9）、脛骨粗面・ヒラメ筋線が発達している。  
また、左膝蓋骨の前面、左脛骨の脛骨粗面周囲および骨幹中央の内側から後面にかけて、骨増殖の痕跡が認められる。加齢に伴う骨変化の可能性が高い。椎骨の椎体は多孔質で、比較的高齢であることを示唆している。

### 第3号墓坑（SK 3）（老年／男性、写真2・4・6）

主な残存部位は、頭蓋、四肢骨、寛骨、椎骨である。頭蓋の残存状態は比較的良好であるが、その他の部位は破損しており、残存状態は概ねやや不良である。

腸骨耳状面の形態変化は、Buckberry and Chamberlain (2002) のステージ VI で、高齢個体と推定される。寛骨の形態は男性的である。

頭蓋は、大後頭孔周辺が破損している。上面観は楕円形である。頭蓋最大長は 189mm、両耳幅は 131mm で、頭蓋の長さ・幅は江戸市中の早桶男性の平均（頭蓋最大長 181.5、両耳幅 126.0）を上回る傾向がある。三主縫合は、外板では部分的に閉鎖、内板ではほぼ完全に閉鎖している。また前頭縫合が全長にわたって残存している。側面観では、前頭部が前方に膨隆している。側頭線は不明瞭だが、乳突上稜は明瞭である。眉間の隆起は明瞭で、外後頭隆起も比較的名瞭である。後面観は家型である。前面観では、前頭結節の発達が顕著で、眉弓は比較的太く隆起する。

顔面では、顔の幅に対する高さが小さく、ウィルヒョウの上顔示数は推定 70.8 で、江戸市中の早桶男性同様（上顔示数 72）、低顔である。眼窩の形態は円形に近い。推定眼窩示数は 76.5 と中眼窩で、江戸市中の早桶男性の平均値（79）と同程度である。鼻示数は 51.2 で、幅の広い鼻である。鼻根部の幅（前眼窩間幅 19.0mm）は、江戸市中の早桶男性（16.9mm）よりやや広い。鼻骨平坦示数は 40.5 と早桶男性（34）をやや上回るが、早桶男性の平均から 1 標準偏差の範囲内におさまる。

下顎は、下顎角から下顎枝にかけて破損している。オトガイ隆起はさほど発達していないが、オトガイ結節は顕著である。下顎体は比較的薄く、下顎体高厚示数（34.4）は早桶男性の平均（42）を下回る。

残存歯は以下の通りである。

× ∩ ∩ ∩ ∩ ∩ ∩ ∩		○ ○ 3 4 5 6 ○ ×
× ○ 6 5 4 3 ○ ○		○ ○ 3 ○ ∩ ∩ ∩ ×

咬耗の程度は、上顎は犬歯・小白歯で Smith の 3、大白歯で 5、下顎は犬歯、小白歯で 4～5、大白歯で 7 である。上顎・下顎ともに歯槽骨の退縮が進行しており、下顎の小白歯・大白歯は 6mm 程度歯根が露出している。

左大腿骨最大長の推定値に基づく推定身長は 144.6cm で、江戸市中の崇源寺跡（1次）の男性の平均（154.5cm）や山梨県米倉山 B 遺跡の男性の平均（155.3cm）を大きく下回る。上腕骨および橈尺骨は、破損により最大長を得られなかった。上腕骨は、三角筋粗面の発達が著しく、骨太な印象を受ける。橈尺骨は、骨間縁の発達が顕著である。概して筋付着部の凹凸が明瞭で、左右尺骨遠位部の方形回内筋付着部が特に著しく隆起している。大腿骨最大長は 364mm で、崇源寺跡（1次）の男性の平均（403mm）を大きく下回るが、中央矢状径（右 26.0mm、左 24.6mm）・中央横径（右 27.3mm、左 26.0mm）崇源寺跡（1次）の男性の平均（中央矢状径 26.7mm、中央横径 26.3mm）と同程度である。後面粗線はさほど発達していない。脛骨、腓骨ともに骨間縁の発達が著しい。椎骨の椎体はやや多孔質で、比較的高齢であることを示唆している。

### 3 まとめ

与曾内遺跡では、第1号、第2号、第3号墓坑より3体の人骨が出土した。残存状態は概して良好ではなく、形態に関する観察や計測が可能な部位は限定的であったが、今回得られた知見は以下のようにまとめられる。

いずれの個体も比較的高齢で、男性あるいは男性の可能性が高い個体である。頭蓋計測値が得られた第2号、第3号の顔面の特徴として、ともに中眼窩であることがあげられるほか、第2号は鼻根部が平坦、第3号は低顔で鼻の幅が広いという特徴が認められた。これらの特徴は、江戸市中の町人を主体とする早桶男性と共通する特徴である。また、第2号と第3号は、江戸市中の崇源寺跡（1次）出土人骨や、山梨県米倉山B遺跡出土人骨に比べ、大腿骨最大長に基づく推定身長が著しく低いが、太さは崇源寺跡（1次）出土人骨と同程度であった。さらに、第1号も含め、上肢・下肢の筋付着部の発達が良好であった。

本遺跡出土の人骨は、一般的な墓地ではなく、「庚申塚」とよばれている塚の周囲に埋葬されていたという点で特殊な事例である。本遺跡出土の人骨は、近世村落の中でも特殊な社会的・歴史的背景を持っていた可能性があり、地域の習俗や信仰の歴史を明らかにする上でも貴重な資料である。今後は、龍ヶ崎地域および茨城県南部における江戸時代人骨の出土例の増加を待って、本遺跡出土人骨の形態的特徴を地域全体の江戸時代人の中に位置付けることが課題となろう。

#### 参考文献

- Bruzek J 2002. A method for visual determination of sex, using the human hip bone. *American journal of physical anthropology*. 117, pp.157-168.
- Buckberry JL and Chamberlain AT. 2002. Age estimation from the auricular surface of the ilium: a revised method. *American journal of physical anthropology*. 119, pp.231-239.
- Sakaue K. 2012. Craniofacial variation among the common people of the Edo Period. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series D*. 38, pp.39-49.
- Smith BH. 1984. Patterns of molar wear in hunter-gatherers and agriculturalists. *American Journal of Physical Anthropology*. 63, pp.39-56.
- Yamaguchi B. 1973. Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo*. 16, pp.161-171
- 梶ヶ山真里・白波瀬亜由実・大谷江里・小沢素子・馬場悠男.2005.「崇源寺・正見寺出土人骨」大成エンジニアリング株式会社編『東京都新宿区崇源寺・正見寺跡—南元町複合施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宗教法人明治神宮
- 馬場悠男.1991.「人体計測法」『人類学講座 別館1人体計測法』雄山閣
- 藤井明.1960.「四肢長骨の長さとの関係に就いて」『順天堂大学体育学部紀要』3,pp.49-61.
- 平田和明・星野敬吾.1999.「山梨県米倉山B遺跡出土の江戸時代人骨」山梨県埋蔵文化財センター編『米倉山B遺跡—米倉山ニュータウン造成に伴う発掘調査報告書』山梨県教育委員会

表3 頭蓋計測値と比較

計測項目	与曾内遺跡		江戸 早桶男性			江戸 甕棺墓男性		
	第2号墓坑	第3号墓坑	平均	S.D.	N	平均	S.D.	N
1. 頭蓋最大長	175	189	<b>181.5</b>	6.4	131	177.4	6.1	50
5. 頭蓋基底長			<b>101.8</b>	4.5	131	99.9	4.2	50
8. 頭蓋最大幅	142		<b>138.5</b>	4.5	131	141.3	5.3	50
8/1 頭蓋長幅示数	81.1		<b>76</b>	3	131	80	4	50
9. 最小前頭幅	90	(103)	93.5	4.2	131	94.4	4.9	50
9/8 横前頭頂示数	63.4		68	3	131	67	4	50
10. 最大前頭幅	116	127	<b>114.7</b>	4.2	131	117.2	5.4	50
9/10 横前頭示数	77.6	(81.4)	<b>82</b>	3	131	81	3	50
11. 両耳幅	(128)	131	126.0	4.3	131	125.0	4.3	50
12. 最大後頭幅	116.3	114.0	108.5	4.6	131	108.2	5.2	50
17. バジオン・ブレグマ高			<b>136.2</b>	4.7	131	138.0	5.7	50
23. 水平周	504	542	518.2	13.9	131	514.9	13.0	50
24. 横弧長	304	330	<b>312.8</b>	9.4	131	321.0	11.7	50
25. 正中矢状弧長	247		370.4	13.3	131	370.2	12.5	50
26. 正中矢状前頭弧長	126	131	125.9	5.7	131	126.9	5.3	50
27. 正中矢状頭頂弧長	121	130	126.3	8.1	131	125.7	8.3	50
28. 正中矢状後頭弧長	(121)		118.2	8.3	131	117.7	5.4	50
29. 正中矢状前頭弦長	108.8	109.5	110.6	4.4	131	110.8	4.4	50
30. 正中矢状頭頂弦長	106.8	122.7	112.7	6.4	131	112.2	6.5	50
31. 正中矢状後頭弦長	100.9		98.4	5.3	131	99.3	4.1	50
29/26 矢状前頭示数	86.3	83.6	88	2	131	87	2	50
30/27 矢状頭頂示数	88.3	94.4	89	2	131	89	3	50
31/28 矢状後頭示数	(83.4)		<b>83</b>	3	131	84	2	50
43. 上顔幅		(106.5)	104.7	4.0	131	104.0	4.0	50
44. 両眼窩幅		102.2	97.9	3.8	131	97.3	3.7	50
46. 中顔幅		(93.0)	<b>99.9</b>	4.7	131	97.3	5.0	50
48H. 上顔高 (ハウエルズ)	(65.8)	(65.8)	<b>68.3</b>	4.0	131	69.9	3.2	50
48/46 上顔示数 (ウィルヒョウ)		(70.8)	72	4	131	76	4	50
49a. 眼窩間幅		24.7	21.0	2.0	131	20.7	2.1	50
50. 前眼窩間幅	19.7	19.0	16.9	2.1	131	16.9	2.1	50
50/44 眼窩間示数		18.6	17	2	131	17	2	50
51. 眼窩幅	46.4	45.1	43.3	2.0	131	43.4	1.8	50
52. 眼窩高	(35.7)	34.5	<b>34.1</b>	1.9	131	35.6	1.9	50
52/51 眼窩示数	(76.9)	76.5	<b>79</b>	4	131	82	5	50
54. 鼻幅		26.3	<b>25.6</b>	1.9	131	24.5	1.7	50
55. 鼻高		51.4	<b>52.3</b>	3.1	131	53.6	2.6	50
54/55 鼻示数		51.2	<b>49</b>	4	131	46	3	50
57. 鼻骨最小幅	5.0	8.3	7.3	1.6	131	7.2	2.0	50
60. 上顎歯槽長			<b>52.3</b>	3.0	131	54.4	3.5	50
61. 上顎歯槽幅	(62.2)		65.7	3.8	131	65.5	3.8	50
62. 口蓋長			45.5	2.7	131	44.7	2.7	50
63. 口蓋幅	32.2	(37.0)	<b>40.7</b>	3.3	131	39.5	3.3	50
67. 前下顎幅	46.4	45.5	47.5	2.5	131	47.4	2.5	50
69. オトガイ高		33.5	35.6	3.2	131	36.0	3.1	50
69 (1) . 下顎体高	30.2	32.0	31.6	2.7	131	32.1	2.4	50
69 (3) 下顎体厚	11.0	11.0	<b>13.2</b>	1.4	131	12.5	1.4	50
69 (3) /69 (1) 下顎体高厚示数	36.4	34.4	<b>42</b>	5	131	39	5	50
<b>顔面平坦度</b>								
FC 前頭骨弦長		(101)	97.3	4	131	96.8	3.7	50
FS 前頭骨垂線長		16.9	14.1	2.4	131	14.5	3.1	50
FS/FC 前頭骨平坦示数		16.7	14	2	131	15	3	50
SC 鼻骨弦長 (鼻骨最小幅)	5.0	8.0	7.3	1.6	131	7.2	2	50
SS 鼻骨垂線長	1.8	3.2	2.5	1	131	2.6	1.1	50
SS/SC 鼻骨平坦示数	34.9	40.5	34	12	131	37	13	50
ZMC 頬上顎骨弦長			<b>99.9</b>	4.7	131	97.6	4.9	50
ZMS 頬上顎骨垂線長			<b>22.7</b>	3.3	131	23.9	2.9	50
ZMS/ZMC 頬上顎骨平坦示数			<b>23</b>	3	131	25	3	50

( ) 内の数値は推定値。

甕棺墓被葬者および早桶被葬者の計測値は Sakaue (2012) より引用。

太字は、Sakaue (2012) で甕棺墓被葬者と円形木棺墓被葬者間で有意差が認められた項目。

表4 四肢骨計測値と比較

計測項目	与曾内遺跡						江戸 崇源寺跡 (1次)			
	第1号墓坑 不明		第2号墓坑 男性		第3号墓坑 男性		男性		女性	
	R	L	R	L	R	L	平均	N	平均	N
<b>上腕骨</b>										
1. 最大長							296	41	260	35
5. 中央最大径							22.4	42	19.3	36
6. 中央最小径							17.8	42	15.2	36
6/5. 骨体横断示数							74.2	42	78.8	36
7a. 中央周										
<b>橈骨</b>										
1. 最大長		(230)					220	51	199	37
4. 骨体横径		16.2				17.0	16.9	51	14.8	37
5. 骨体矢状径		11.4				12.5	11.9	51	10.1	37
5/4. 骨体断面示数		70.4				73.5	70.4	51	68.2	37
5 (5) . 中央周径		45				47	45.9	51	39.9	37
<b>尺骨</b>										
1. 最大長							237	49	230	37
11. 骨体矢状径		(12.8)				12.4	11.8	50	11.6	37
12. 骨体横径		(16.8)				17.7	16.1	50	14.9	37
11/12. 骨体横断示数		(76.2)				70.1	70.4	50	77.8	37
3 (a) . 中央周							48.4	50	40.5	37
<b>大腿骨</b>										
1. 最大長				(380)		364	403	47	371	39
6. 骨体中央矢状径		29.5	24.5	25.1	26.0	24.6	26.7	48	23	40
7. 骨体中央横径		27.0	27.5	28.8	27.3	26.0	26.3	48	23.5	40
6/7. 骨体中央断面示数		109.3	89.1	87.2	95.2	94.6	101.5	48	97.8	40
8. 骨体中央周		91	83	84	84.5	82	84.3	48	73.9	40
<b>脛骨</b>										
1a. 最大長										
8. 中央最大矢状径							28.9	34	23.7	22
9. 中央横径							21.2	34	19.1	22
9/8. 中央横断示数							73.3	34	80.5	22
10. 骨体中央周							77.8	34	67.9	22
8a. 栄養孔位最大径			32.8	32.0	31.2	31.6				
9a. 栄養孔位横径			19.5	19.5	24.5	22.1				
9a/8a. 脛 (扁平) 示数			59.5	60.9	78.5	69.9				
10a. 栄養孔位周			85	84	88	86				
<b>腓骨</b>										
1. 最大長							324	33	298	15
2. 中央最大径							14.1	34	12.5	15
3. 中央最小径							10.4	34	9	15
3/2. 体断面示数							73.7	34	72	15
4. 中央周							41.3	34	35.9	15
<b>推定身長</b>										
大腿骨				(1485.6)		1445.6	154.5	81	146.5	63

( ) 内の数値は、推定値を表す。  
 崇源寺 (1次) の計測値は梶ヶ山ほか (2005) より引用。



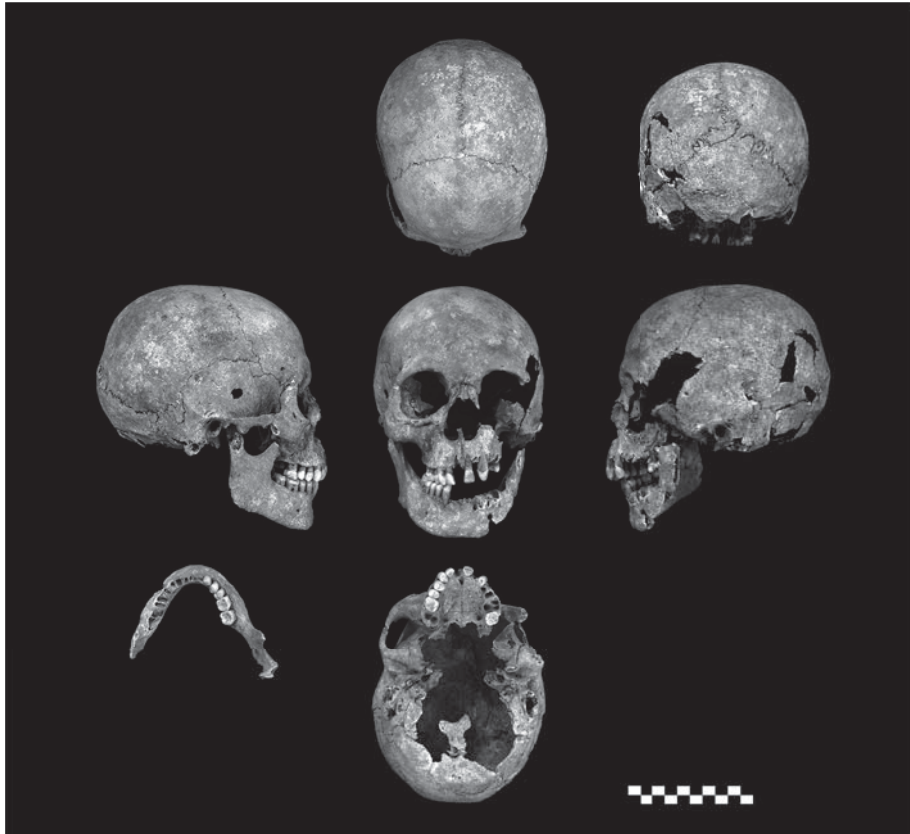


写真1 第2号墓坑 (SK 2) 頭蓋

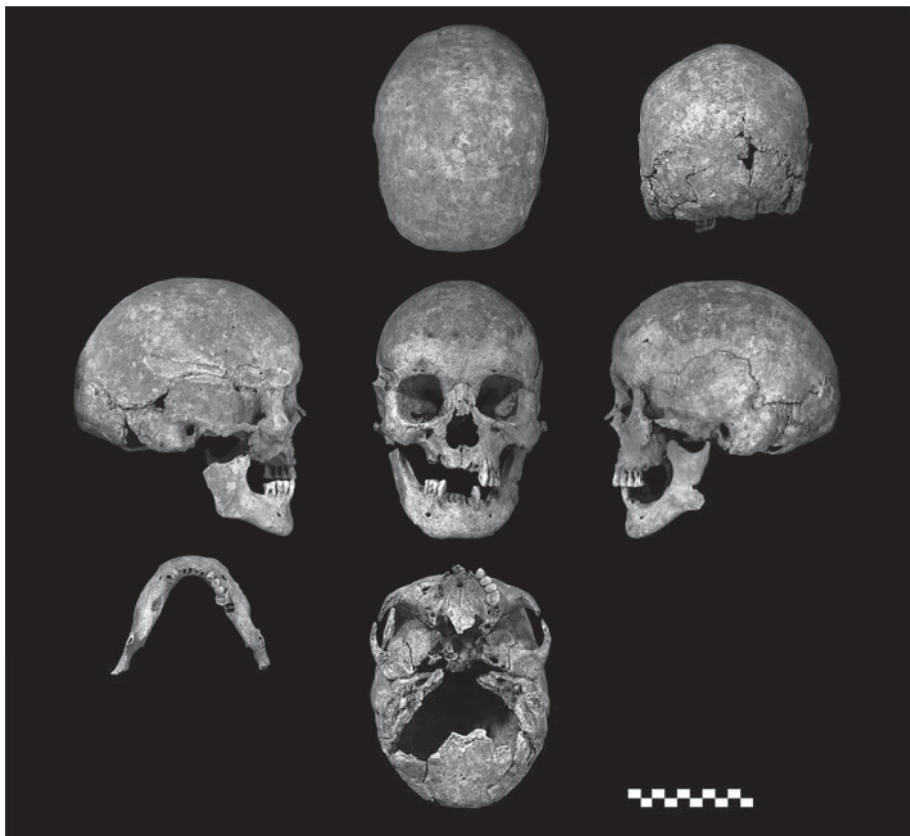


写真2 第3号墓坑 (SK 3) 頭蓋



写真3 第2号墓坑 (SK 2) 四肢骨



写真4 第3号墓坑 (SK 3) 四肢骨

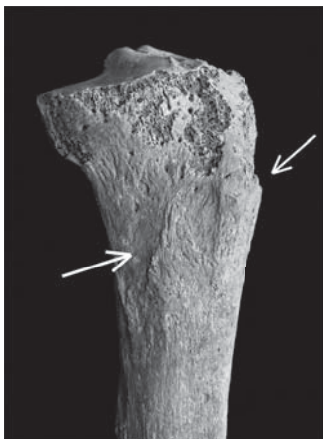


写真5 第2号墓坑 (SK 2) 左脛骨・左膝蓋骨  
骨増殖の痕跡

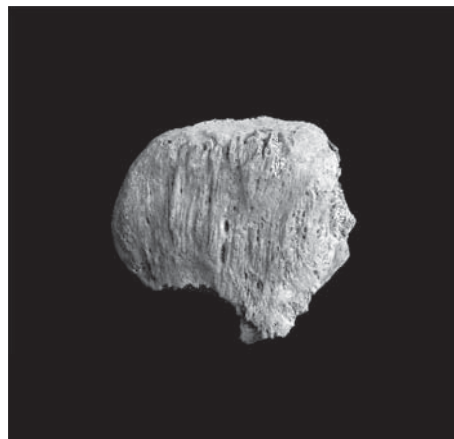


写真6 第3号墓坑 (SK 3) 右尺骨  
方形回内筋付着部の発達

(5) 土坑

第4号土坑 (SK 4) (第15図 PL 2)

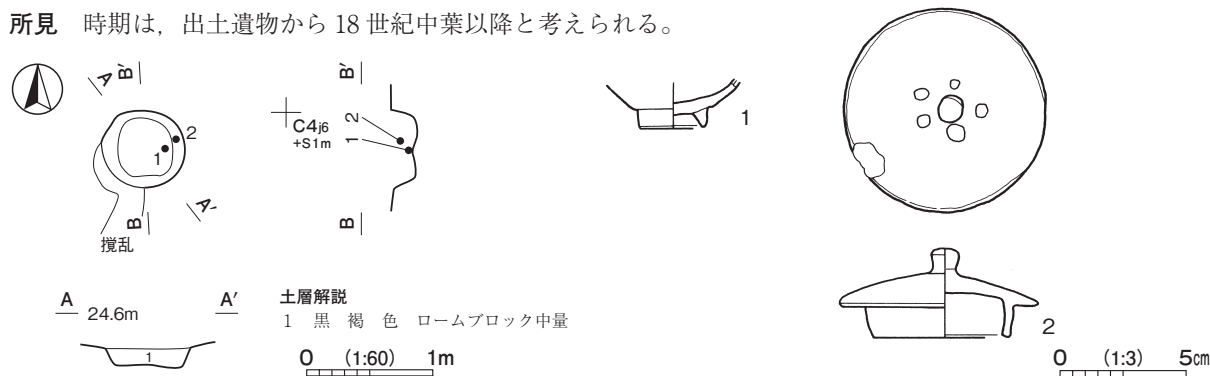
位置 調査区南東部のC 4j5区, 標高24.5mの台地上に位置している。

規模と形状 長径0.65m, 短径は0.61mの円形である。深さは16~20cmで, 壁は外傾している。

覆土 単一層である。ロームブロック主体土で埋め戻されている。

遺物出土状況 陶器2点(小坏, 瓶蓋)が出土している。

所見 時期は, 出土遺物から18世紀中葉以降と考えられる。



第15図 第4号土坑・出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表 (第15図 PL 7)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	小坏	-	(1.8)	2.5	長石・石英 灰白	ロクロ成形 付け高台 腰部から高台無袖	灰釉	瀬戸・美濃系	覆土中	40% 1800~1860
2	陶器	土瓶蓋	8.0	3.5	5.4	長石・石英 灰白	ロクロ成形 型押 山蓋 梅花摘みに梅花文 口受け有 摘み貼付 摘み径1.2cm	御深井 釉カ	瀬戸・美濃系	覆土中	100% 1670~1750

(6) ピット群

第2号ピット群 (第16図)

位置 調査区中央東部のC 4i5~C 4i6区, 標高24.5mの台地上に位置している。

規模と形状 構成するピットは3か所で, 長径0.29~0.38m, 短径0.20~0.35mの円形または楕円形で, 深さは30~57cmである。

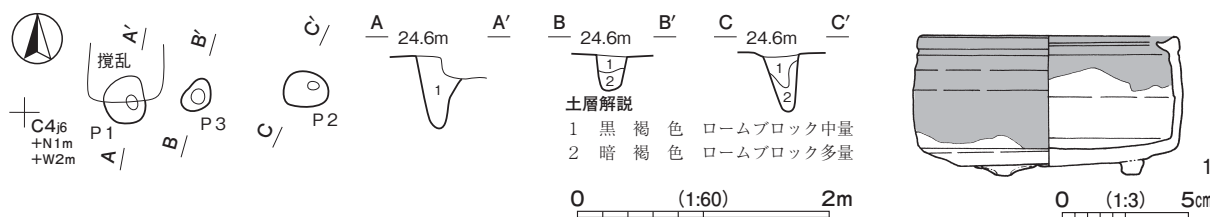
覆土 単一層である。ロームブロック主体土で埋め戻されている。

遺物出土状況 陶器1点(香炉)が出土している。

所見 時期は, 出土遺物から17世紀中葉以降と考えられる。第4号土坑が近接していることから, 関連する遺構の可能性が考えられる。

第2号ピット群計測表

ピット番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	C4i5	[円形]	(38)	35	57
2	C4i6	楕円形	35	30	45
3	C4i5	楕円形	29	20	30



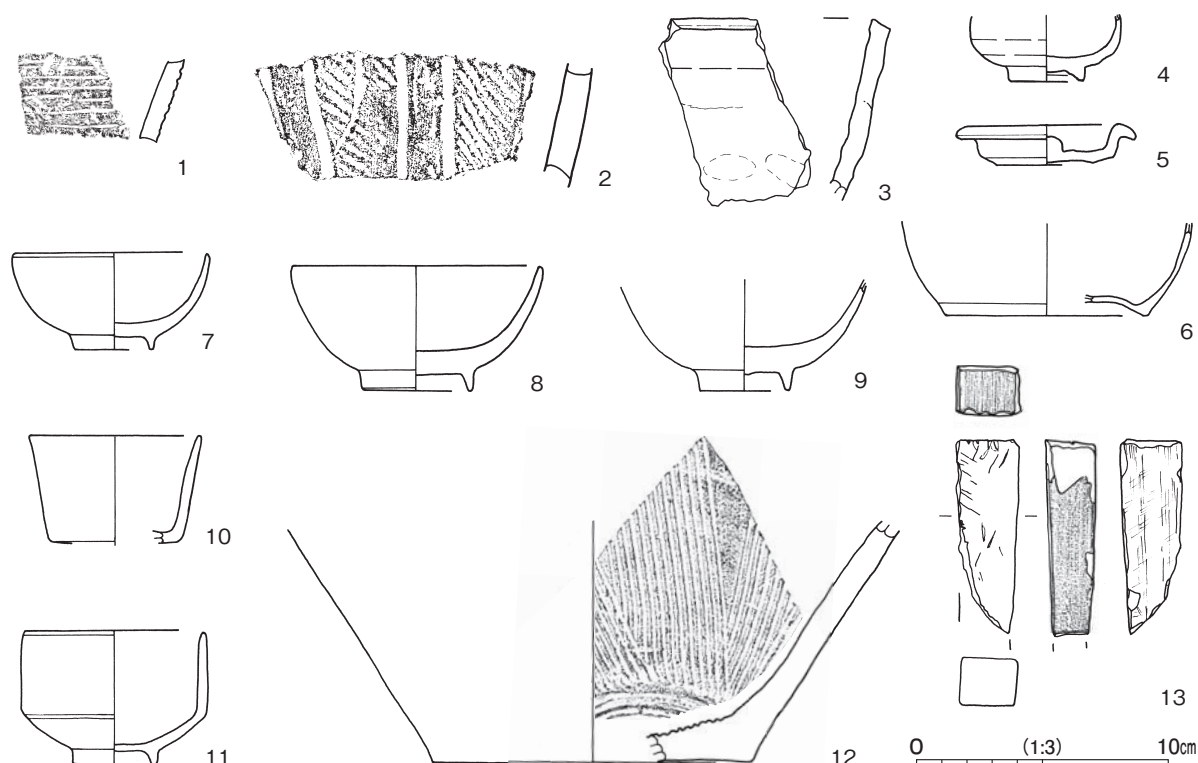
第16図 第2号ピット群・出土遺物実測図

第2号ピット群出土遺物観察表 (第16図 PL 7)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	香炉	[10.0]	5.5	7.3	長石・明黄褐	ロクロ成形 有三足半筒形 腰部・内面下部・底部無袖	灰釉	瀬戸・美濃系	覆土中	60% 1750~1840

4 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物と表土から出土した遺物について、実測図及び観察表を掲載する。



第17図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第17図 PL 7・8)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	条線文	SI 1 覆土中	縄文時代後期
2	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	沈線 充填縄文 RL	TM 1 盛土	縄文時代中期後葉 加賀利 E III式
3	土師質土器	鍋	長石・石英・赤色粒子	橙	外面指頭圧痕	表土	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
4	陶器	小碗	-	(2.6)	2.9	長石・黒色粒子 灰白	腰張形 腰部から高台無軸	灰釉	瀬戸・美濃系	表土	25%
5	陶器	蓋	7.2	1.6	3.9	緻密 灰黄	型押 落とし蓋 菊花摘み 底面無軸	鉄釉	在地	表土	100% 1800～1860
6	陶器	瓶類	-	(3.7)	[8.0]	長石・石英 灰白	土瓶。外・内面袖掛け分け 腰部から底部無軸	鮫肌釉 透明釉	在地	表土	5%
7	磁器	小碗	7.7	3.8	3.1	緻密 灰白	染付 削り高台 丸形 体部外面山文に雁文 高台脇・高台圏線文	透明釉	肥前系	表土	70%
8	磁器	中碗	[9.8]	4.9	2.3	緻密 灰白	染付 削り高台 丸形 くらわんか手 体部外面蘭文 腰部 高台脇・高台圏線文	透明釉	肥前系	表土	60% 1690～1750
9	磁器	碗	-	(4.4)	3.6	緻密 灰白	染付 削り高台 丸形 くらわんか手 体部外面蘭文 腰部圏線文 高台二重圏線文 見込目跡3	透明釉	肥前系	表土	20% 1690～1750
10	磁器	小碗	[6.7]	(4.3)	-	緻密 灰白	染付 口縁部外面圏線文・内面四方禪文 体部外面斜め格子文地に草花文 腰部・見込目跡3	透明釉	肥前系	表土	10% 1750～1840
11	磁器	小碗	7.1	5.3	3.3	緻密 灰白	染付 削り高台 腰折形 上下袖掛け分け 内外面袖掛け分け 量付無軸 [点風乃風]	緑・鉄・透明釉	不明	表土	100% 近現代
12	陶器	播鉢	-	(9.6)	[12.8]	長石・石英 浅黄橙	口クロ成型 ベタ底 櫛目13本1単位 見込目円状	鉄釉	瀬戸・美濃系	表土	20% 1700～1860

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
13	砥石	(7.8)	(2.5)	2.0	(62.71)	貢岩	切断痕	表土	

## 第4節 総括

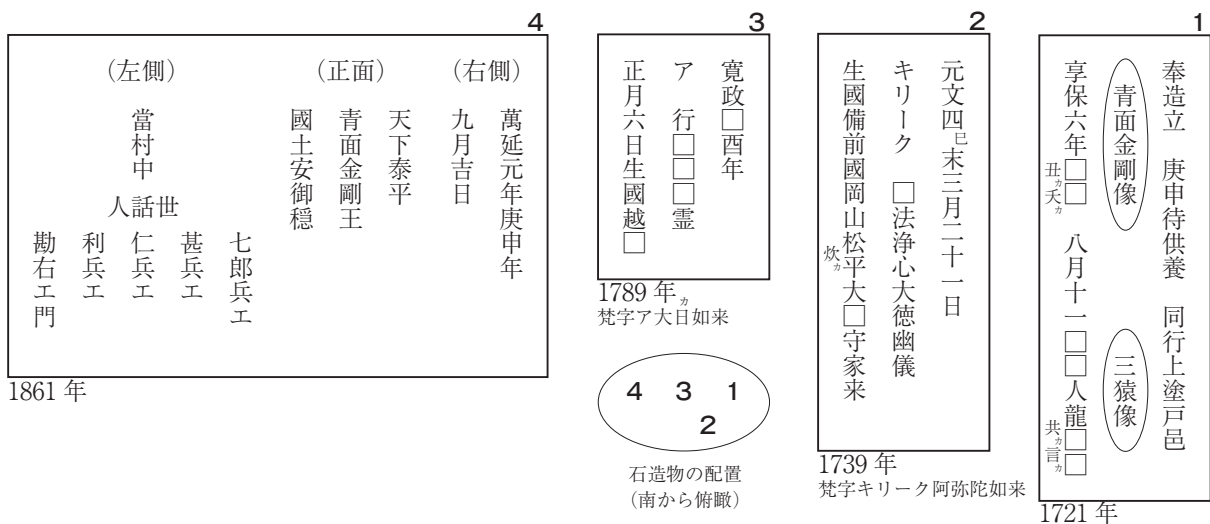
今回の調査では、弥生時代のピット群1か所、奈良時代の竪穴建物跡1棟、江戸時代の掘立柱建物跡2棟、塚1基、墓坑3基、土坑1基、ピット群1か所を確認した。奈良時代の竪穴建物跡は、8世紀前葉に位置付けられ、調査区域内の北西部で確認されたのみである。東側で遺構が確認されていないことから、当調査区域より北側の台地平坦部に集落域が展開することが予想される。ここでは、江戸時代の塚とその裾部で確認できた墓坑3基についてまとめ、総括としたい。

塚の頂部に祀られた石造物の配置は、下図の通りである。調査時の聴き取りから、塚は、当地区では庚申塚と呼ばれている。石造物4基は以前に集められてコンクリートを敷設して固めたとのことで、塚構築当時の状況ではないことを確認した。

石造物の1と4の2基は、銘文から庚申信仰の中で造立された庚申塔と確認できる。1は、享保6（1721）年銘で4基ある石造物中で最も古く、正面に青面金剛像とその下に三猿が彫られている。庚申待を3年18回続けた記念に建立される庚申塔が多いことから、同様に造立された石仏と考えられる。青面金剛は、庚申信仰の中で発展した神で三尸の虫を抑える神とされている。4の庚申塔の正面には、この神の銘が彫られている。造立は、銘から萬延元（1861）年であることが確認でき、塗戸村の世話人5名の名も刻まれている。庚申塚の築造は、塚から出土している遺物の時期が、18世紀を主体としていること、2基の庚申塔のうち、古い1の銘が1721年とあることから、これよりも若干古い18世紀初頭と推測しておきたい。

石造物の2と3の2基は、銘文から墓石と判断される。2は元文4（1739）年、3は寛政年間の造立であることから、1789～1800年のうちで、□酉年に当たるのは巳酉年である寛政元（1789）年と考えられる。また、この2基の墓石の銘にある「生國備前國」と「生國越□」から、埋葬された人は他国出身者であることが指摘できる。この2基の墓石は、塚の東脇に確認できた3基の墓坑との関係が推測される。墓坑と塚盛土との重複関係は、発掘調査の段階では確認できなかったが、この墓石の年代から推測して、塚よりも新しい時期に掘り込まれた墓坑と考えられる。

龍ヶ崎市域における幕末期の領主の配置状況を知りうる史料である『旧高田領取調帳』から、塗戸村の支配状況を確認できる。塗戸村における旗本の支配は、蜷川能登守、江原桂助、山角徳次郎、川勝新太郎、大岡治



第18図 石造物の配置と銘文

右衛門の5名を確認できる<sup>1)</sup>。このうちの蝮川能登守の「能登」は「越中」であることから、越中から塗戸村内へ来訪する人物があってもよいものと推測できる。このことから、墓石銘文の「生國越□」を「生國越中」と推測すれば、当地域と縁のある人物が葬られた可能性もあると考えられる。この造立された2基の墓石から、塚の脇で確認した墓坑3基のうちの2基には、墓石が造立されたものと推測しておきたい。

確認した墓坑3基は、重複関係から第3号が最も古く、第1号と第2号が新しい。六道銭が出土した墓坑は、第1号と第2号の2基で、これを丁寧に埋葬されたとみて、この六道銭が出土した第1号と第2号の墓坑に墓石が造立されたものと推測したい。墓坑の重複関係と墓石銘文から、新しい第2号を寛政□酉（1789<sub>年</sub>）年頃、古い第1号を元文4（1739）年頃に埋葬されたものとする。なお、六道銭は、寛保2（1742）年の六道銭禁令もあり、江戸では18世紀中葉以降に出現率が低下する傾向があるとされる<sup>2)</sup>。当地域では六道銭の習俗が残っており、納めることが普通であったか、手厚く葬られた結果とも推測される。

江戸時代には、旅行に際して携帯された身分証明書として、「関所手形」や「往来手形」が知られている。「往来手形」には、旅先で死亡しても、死亡した村の習慣に従い、その所に葬るように書付けられることが定式であることから、今回確認された墓石に記された人物は、当地で亡くなった人物が携帯した往来手形の書付けに従い、この地へ葬られたとも考えられる。

3基の墓坑は、ほぼ同じ位置に重複して構築されていることから、往来手形を携帯した旅行者が塗戸村落内で亡くなった際には、埋葬の場として決まっていたとも考えられる。このことから、残る1基の第3号墓坑もまた、他地域の出身者が埋葬されたものと推測したい。この第3号墓坑は、墓坑の重複関係から最も古いことが確認できる。墓石の造立は18世紀に入って造立が始まり、18世紀中葉以降に広まったとされる<sup>3)</sup>。このことから、最も古い第3号墓坑は、第1号墓坑より古く位置付けられることから、墓石を逸した可能性もあるが、墓石の造立が始まる以前の墓坑と推測しておきたい。

庚申塚の脇に埋葬されている事例は、管見では確認できなかったが、旅行の往来時に塗戸村内で亡くなった人物を埋葬するにあたり、縁故のない死者への供養も行える場所として、信仰の対象であった庚申塚の脇へ埋葬されたものと理解しておきたい。江戸時代における往来した旅人の死と埋葬のあり方の一端を示す事例と考えられる。江戸時代の旅行では、伊勢参詣や四国遍路などがあげられるが、街道筋でもない常陸国内の塗戸村で亡くなっていることから、いかなる理由で当地を訪れていたのか知る由もないが大変興味深い。

考古学的な調査成果と合わせ、石造物や墓石銘文、古文書などの文献史学からの検討は今後の課題である。残された課題も多いが、今後の地域の歴史解明に、この調査成果が生かされることを期待したい。

#### 註

- 1) 龍ヶ崎市編さん委員会編『龍ヶ崎市史 近世編』龍ヶ崎市教育委員会 1999年3月
- 2) 谷川章雄「江戸の墓に納めるもの－とくに六道銭を中心に－」『日本葬送文化学会 会誌』第11号 2009年3月
- 3) 谷川章雄『江戸時代の墓制・葬制の考古学的研究』早稲田大学審査学位論文 博士（人間科学） 早稲田大学大学院 人間科学研究科 2010年1月

#### 引用・参考文献

- ・龍ヶ崎市編さん委員会編『龍ヶ崎市史 近世史料編II』龍ヶ崎市教育委員会 1994年3月
- ・五島敏芳「往来手形考」『史料館研究紀要』第29号 史料館 1998年2月
- ・内田九州男「近世の巡礼者たち－往来手形と身分－」『四国遍路と世界の巡礼 平成16年度 愛媛大学国際シンポジウムプロシーディングス』国際シンポジウム実行委員会 2005年3月
- ・皆川貴之『吉原向遺跡・牛頭座遺跡・赤太郎遺跡2 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IV』茨城県教育財団文化財調査報告第433集 2018年3月

写 真 图 版







第 1 号竖穴建物跡



第 1 号竖穴建物跡遺物出土狀況 (1)



第 1 号竖穴建物跡遺物出土狀況 (2)



第 1 号竖穴建物跡遺物出土狀況 (3)



第 1 号竖穴建物跡遺物出土狀況 (4)

PL2



第1～3号墓坑人骨出土状况



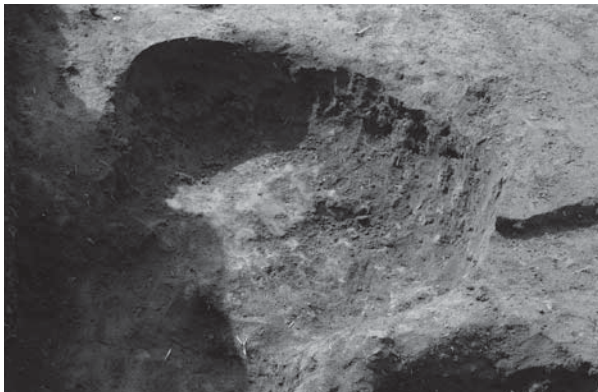
第1号墓坑人骨出土状况



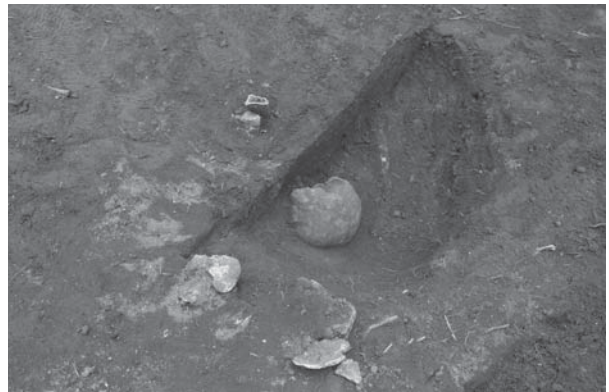
第1号墓坑



第2号墓坑人骨出土状况



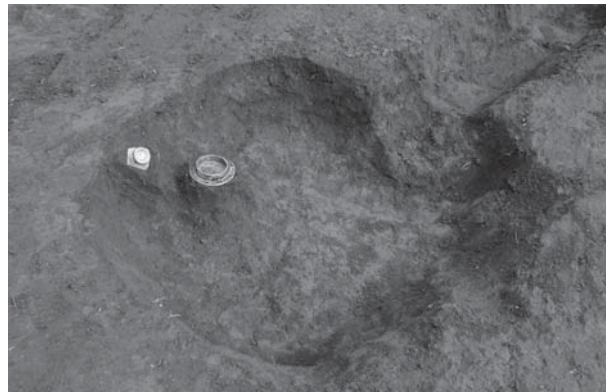
第2号墓坑



第3号墓坑人骨出土状况



第3号墓坑



第4号土坑遗物出土状况



第1号塚全景



第1号塚土層断面（1）



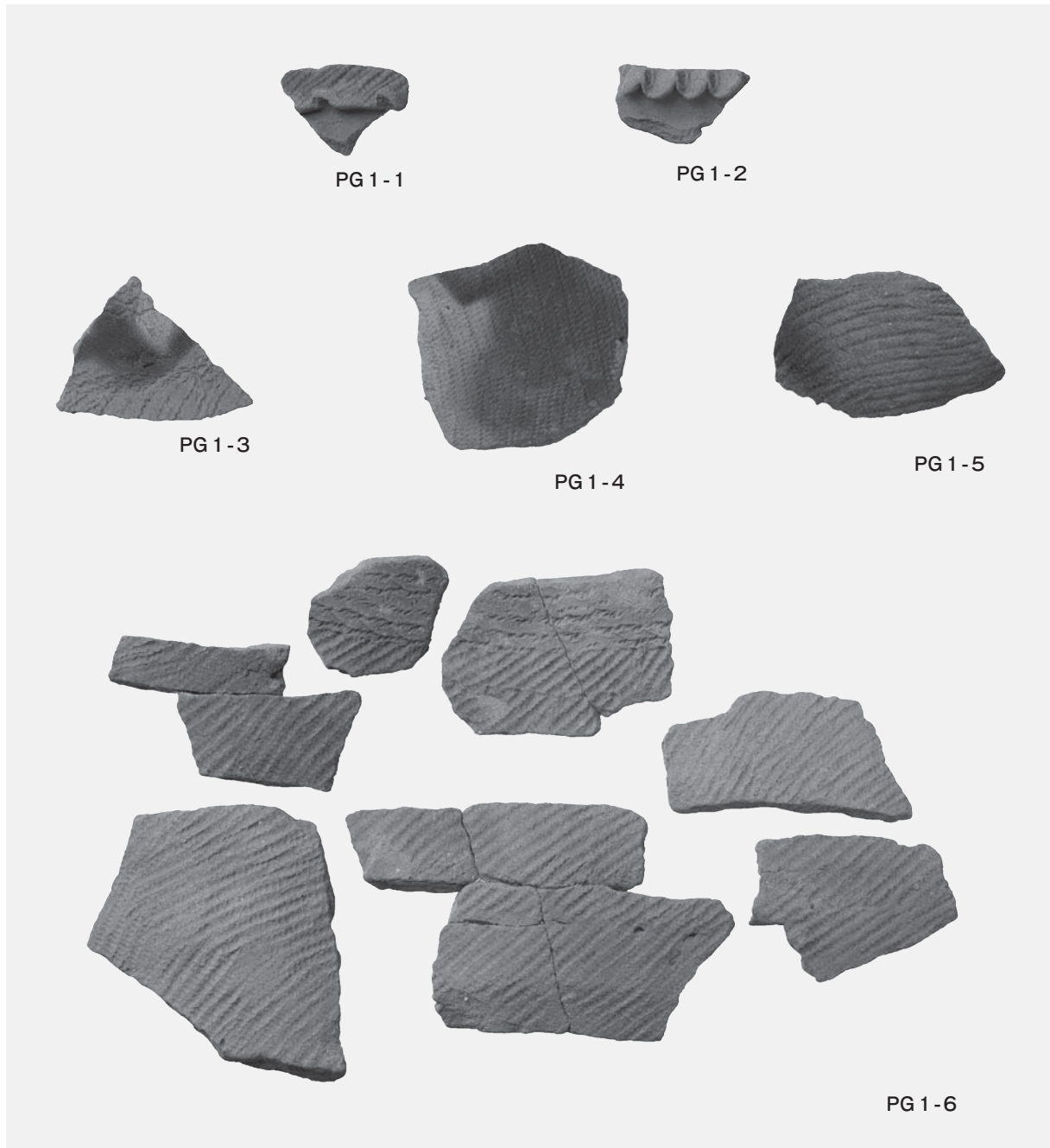
第1号塚土層断面（2）



第1号ピット群



第1・2号掘立柱建物跡



第1号ピット群・第1号竪穴建物跡出土遺物



TM 1-1



TM 1-2



TM 1-3



TM 1-4



TM 1-5



TM 1-6



TM 1-7



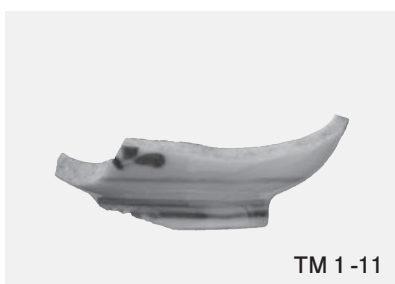
TM 1-8



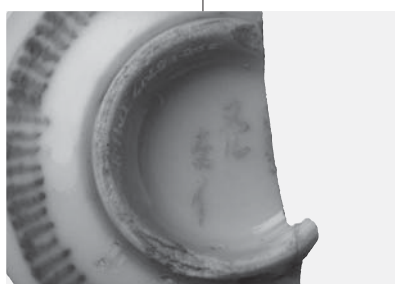
TM 1-9



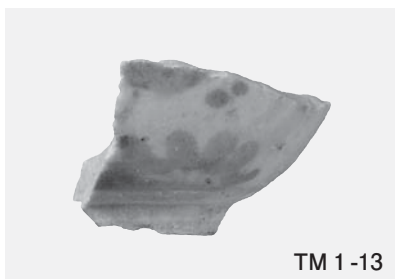
TM 1-10



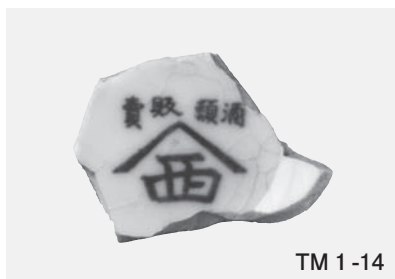
TM 1-11



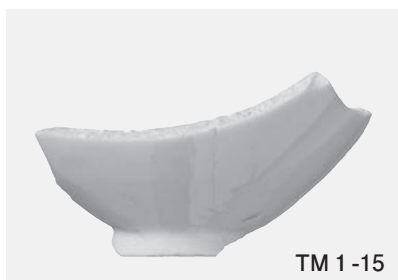
TM 1-12



TM 1-13



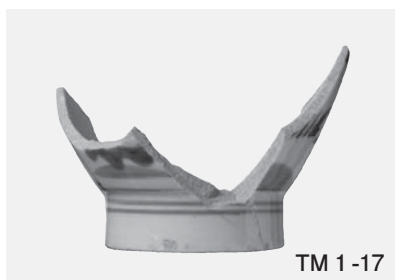
TM 1-14



TM 1-15



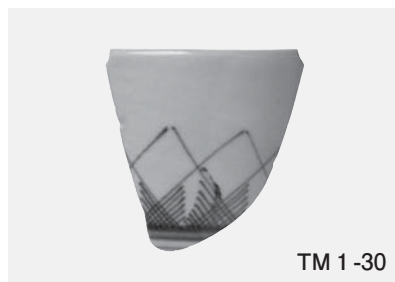
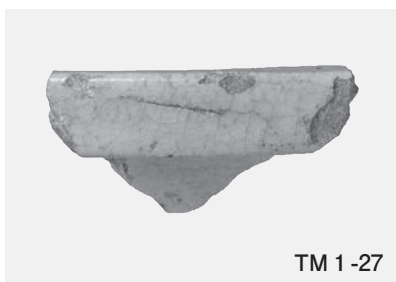
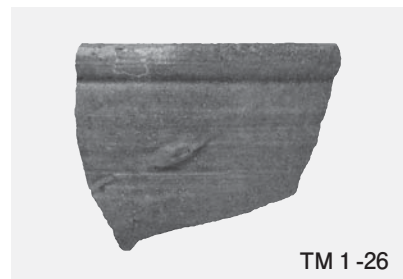
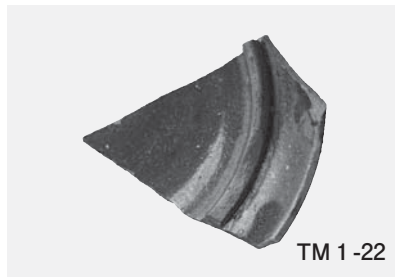
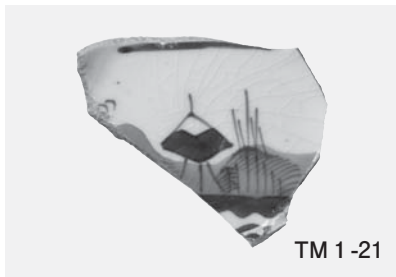
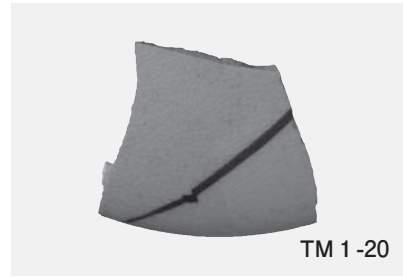
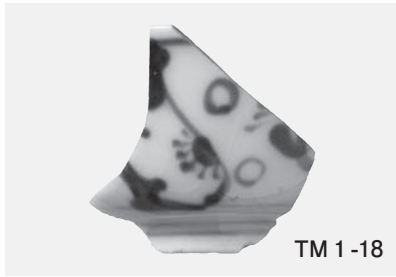
TM 1-16



TM 1-17

第1号塚出土遺物(1)

PL6



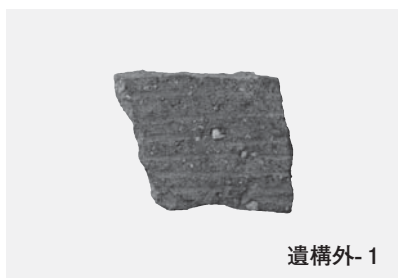
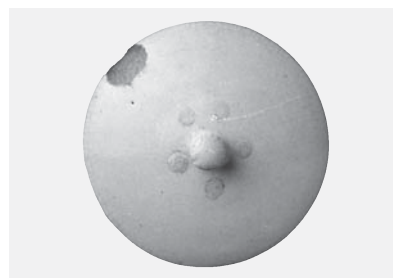
第1号塚出土遺物 (2)



TM 1-39



SK 4-1



遺構外-1



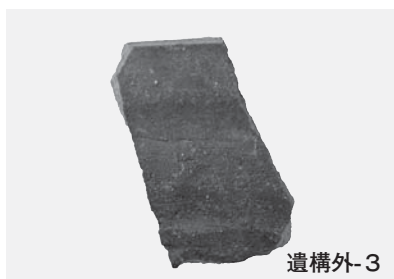
PG 2-1



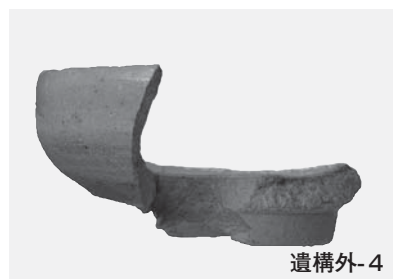
SK 4-2



遺構外-2



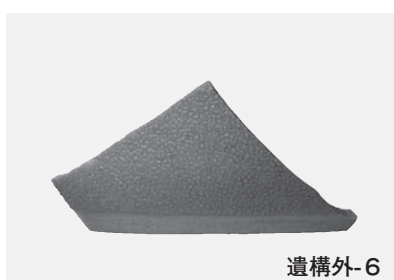
遺構外-3



遺構外-4



遺構外-5



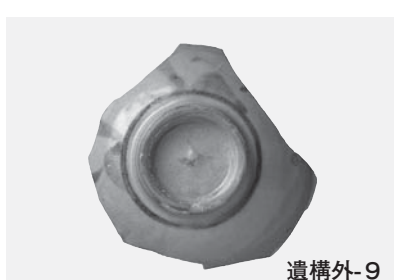
遺構外-6



遺構外-7



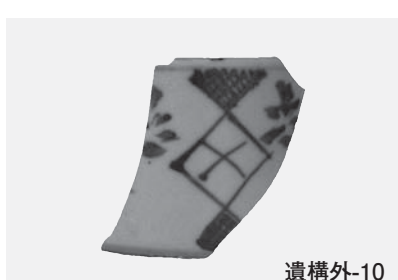
遺構外-8



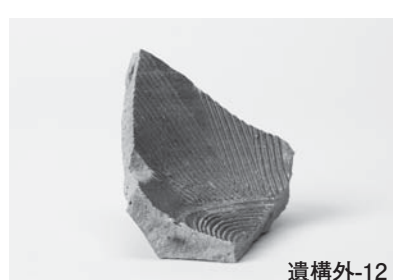
遺構外-9



遺構外-11



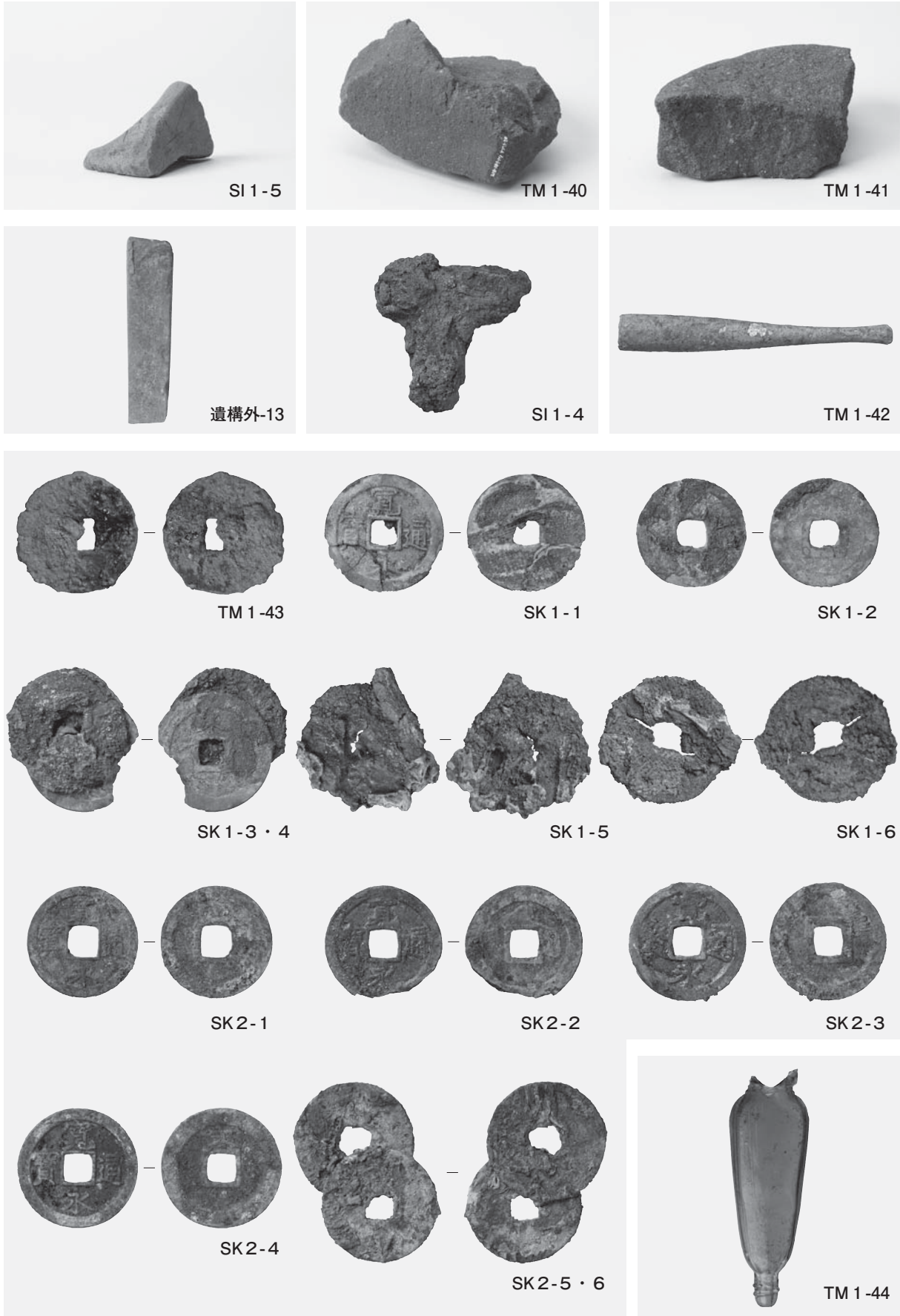
遺構外-10



遺構外-12

第1号塚・第4号土坑・第2号ピット群・遺構外出土遺物

PL8



第1号竖穴建物跡・第1号塚・第1・2号墓坑・遺構外出土遺物



# 抄 録

ふりがな	よそうちいせき							
書 名	与曾内遺跡							
副 書 名	急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 447 集							
著 者 名	内堀 団 中山 なな 梶ヶ山 真里 坂上 和弘							
編 集 機 関	公益財団法人茨城県教育財団							
所 在 地	〒 310 - 0911 茨城県水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2 TEL 029 - 225 - 6587							
発 行 日	2020 (令和 2) 年 3 月 16 日							
ふりがな 所収遺跡	ふ り が な 所 在 地	コード	北 緯	東 経	標 高	調査期間	調査面積	調 査 原 因
与曾内遺跡	茨城県龍ヶ崎市 塗戸町991番地ほか	08208   089	35 度 55 分 19 秒	140 度 14 分 43 秒	25 m	20170601 ~ 20170630	475 m <sup>2</sup>	急傾斜指定地 宮下地区急傾斜 崩壊対策事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
与曾内遺跡	集落跡	弥生時代	ピット群 1 か所		弥生土器 (壺)			
		奈良時代	竪穴建物跡 1 棟		土師器 (甕), 須恵器 (坏・蓋), 石器 (砥石), 金属製品 (刺金)			
	塚 その他	江戸時代	掘立柱建物跡 2 棟	塚 1 基	墓 坑 3 基	土 坑 1 基		
要 約	<p>与曾内遺跡の遺跡範囲の南東縁辺部を調査した。弥生時代から江戸時代までの複合遺跡である。主体となるのは、近世の遺構であるが、弥生時代のピット群と奈良時代の竪穴建物跡が確認できた。調査位置から、古代の集落は、今回の調査区域よりも北東の台地中央部へ広がるものと予想される。</p> <p>庚申塚は、石造物や出土遺物から 18 世紀に構築されたと推測される。また、塚の裾部から墓坑が 3 基確認でき、墓石の記年銘から、塚構築後に埋葬されたものと推測される。2 基の墓石に記された「生國備前國」, 「越□」から、被葬者の出自は、他国の人物であることが確認できた。このことから、庚申塚の脇への埋葬は、縁者のない人を埋葬する場として庚申塚の脇へ埋葬することで供養できるようにしたものとして推測される。</p>							

印刷仕様  
編集 OS Microsoft Windows 10 Pro  
編集 Adobe InDesign CC 2019  
図版作成 Adobe Illustrator CC 2019  
写真調整 Adobe Photoshop CC 2019  
Scanning EPSON DS-G20000  
使用Font OpenType リュウミンPro L-KL, 太ゴB101 Pro Bold  
中ゴシックBBB Pro Medium  
写真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印刷 印刷所へは, Adobe InDesign CC 2019でデータ入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第447集

## 与 曾 内 遺 跡

急傾斜指定地宮下地区急傾斜崩壊対策  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和2(2020)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社  
〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2  
TEL 029-231-4241



